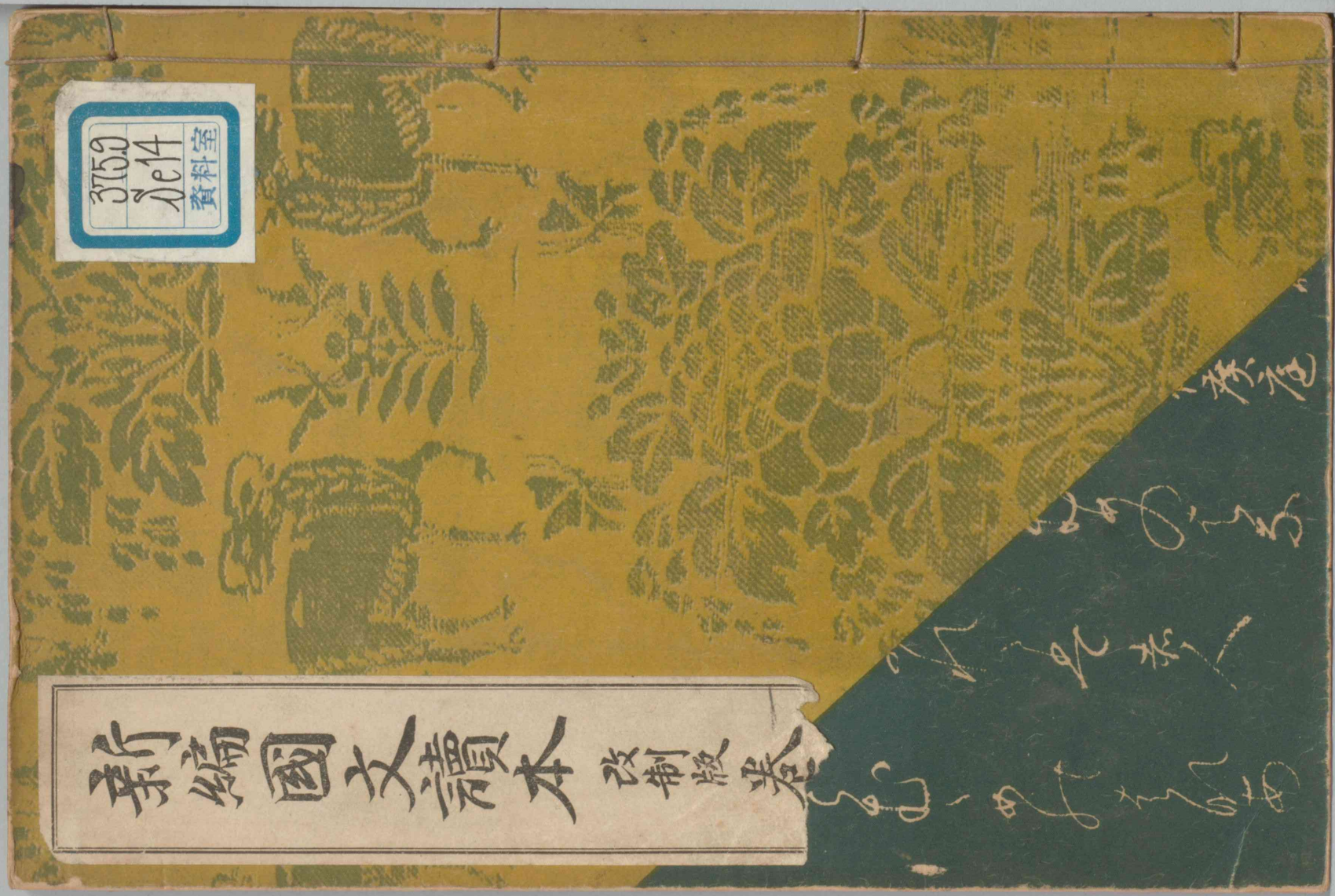
41549
教科書文庫
4
810
41-1937
200030
1469

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3753
.Je14
資料室

資料室
375.9
Se14

昭和十二年十二月二十二日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科·實業學校國語科

新編國文讀本

千田憲編

改制版

東京 右文書院藏版

「我が國花」參照

櫻

廣島大學圖書之印

廣島大学 教 30750 図書

新編國文讀本　改制版　卷一

目次

一　我が國花……芳賀矢一……一
二　これでも櫻だぞ……相馬御風……五
三　ポチ……二葉亭四迷……八
四　加藤清正と熊本城……大類伸……二二
五　二宮尊徳翁……福住正兄……二九
六　菖蒲の節句……島崎藤村……三三
七　比叡の鳥……高濱虚子……三八
八　新涼……島木赤彦……四三

九　御親閲をお受けして……四八
一〇　美しい日本……山村暮鳥……五五
一一　皇天の加護……一二　木のぼり……前田夕暮……六八
一三　大儒息軒先生……森鷗外……七三
一四　勇ましい朝……一五　田園日記……千家元麿……八一
一六　勘左衛門……中勘助……八四
一七　國境……一八　心の洗濯……夏目漱石……九〇
一九　敏智……柴田鳩翁……一〇三
二〇　三百年の老柏……北原白秋……九七
元田永孚……一一〇
和田垣謙三……一一二

二一　涼み臺……吉村冬彦……一一八
二二　月見草……阿部次郎……一二七
二三　洒勾なる二兒へ……大町桂月……一三〇
二四　祖國……佐々木指月……一三三
二五　堪忍……柳澤淇園……一四一
二六　母と蘆……西條八十……一四三
二七　上杉謙信……「日本外史」に據る……一四九
一　爭ふ所は弓箭に在り……一四九
二　箸を捨てて歎ず……一四九
三　何を以てか天下に對せん……一五〇
二八　國引……澁川玄耳……一五一
二九　旅順の戰跡……杉村楚人冠……一五五

一一〇　惠まれた國土……清原貞雄……一六二
一一一　滿蒙の四季……上田恭輔……一六七
附錄
國語假名遣表
常用略字表

廣島文理大學圖書之印

新編國文讀本　改制版　卷一

芳賀矢一
福井縣の人、國文學者、文學博士、昭和二年歿、年六十一。

爛漫
特有
濃艷

cherry

一　我が國花

芳賀矢一

我が日本の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であらう。今、支那でいふ櫻桃が櫻に相當するといふことであるが、日本の花の美しさには及ばないとのこと。西洋のチェリーも、實は大きいが花の色は薄い。爛漫と咲亂れた櫻花の、山を埋め、谷に滿ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。

支那の國花は牡丹である。濃艷な粧は美しいには相

艶冶
清楚
野趣

大宮人
楚々
野情
空に知られぬ雪
「櫻散る木の下風は寒からで空にしられぬゆきぞ降りける」（拾遺集、紀貫之）
風趣

違ないが、あつさりとした日本趣味には適しない。香氣も艶冶の態があつて、清楚人を動かす野趣に乏しい。併し薔薇は歐米人の花の王と稱するものである。

日本の櫻はその色は極めてあつさりとしてゐる。但し純白ではない。いはゆる櫻色である。一樹に無數の花をつけて、咲く時は一時に爛漫と殘なく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚々たる野情も添はつてゐる。空青く、水清い日本の氣候には最もよく釣合つて、深山・都市、どこにあつても皆宜しい。「空に知られぬ雪」と散つては、一段の風趣再び世界を花の中に包んでしまふのである。

花曇
照りもせぬ……「照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」（新古今集、大江千里）
駘蕩
峻嚴

櫻の咲くのは春の半である。春の日本は水蒸氣が多い。晝はどんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない花曇、夜は照りもせぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。そよ〳〵と面を吹く や春の風、春の特色はどこまでも駘蕩といふ點にあり、溫和なところにあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵もないところにある。櫻はこの時候に孕まれて咲出でる花である。際立つた

上野の鐘と櫻花

特色のないところが、卽ちその特色である。

吉*野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

これは滿山花に包まれた吉野山の景色である。

花*の雲鐘は上野か淺草か

これは大都會の花に掩はれた光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花ではなくして、木として賞翫する花である。否、多くの木を集めて、人は唯花中に在つて賞翫する花である。上から見て愛でる花ではなくして、下から眺めて愛でる花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の人となるのである。

—（月雪花）—

吉野山……幕末の歌人八田知紀の歌。

花の雲……元祿時代の俳人松尾芭蕉の句。

賞翫

二　これでも櫻だぞ

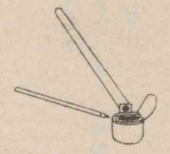
相馬御風

或時、一*茶さんは櫻のお花見に出かけました。大勢の人が花にうかれて騒ぎ廻つてゐました。どの木もどの木も、みごとに花を咲かせてゐました。一茶さんはさうした中をあちこち花を眺めながら歩いてゐましたが、ふと美しく花の咲いてゐる小さな櫻の若木のあるのに目をつけました。大勢の人はたゞ花の咲いた櫻の木ばかり見てゐて、誰一人さうした若木に目をとめる者もありませんでした。それでも若い木は勢よくぐん〳〵伸びてゐるのでした。

相馬御風　名は昌治、新潟縣の人、詩人、評論家、明治十六年生。

一茶　本名は小林信之、信濃國（長野縣）の人、俳人、文政十年（三四八七）歿、年六十五。

うかれる



矢立

憚りながら

一茶さんはそれがたまらなくかはゆくなりました。そして早速腰の矢*立をとり出し、紙にすら〳〵と俳句を書いて、それを一本の若木の櫻の枝に結びつけました。その俳句はかういふのでした。

私も憚りながら櫻かな

すると、これまで花ばかりに氣を取られてゐた人達も、その若木に目をつけるやうになりました。そして一茶さんのその俳句を讀んでは「なるほど、愉快愉快。」と喜びました。この話は皆さんもさぞ「愉快愉快。」と叫んで喜ぶことでせう。

「おれはまだ幼い。おれはまだ花を咲かせることは出

見てをれ

代る―替る

來ない。しかしおれだつて憚りながら櫻だぞ。今に見てをれ。どんなにでも立派に花を咲かせて皆を驚かして見せるぞ。」

一茶さんはさういふやうな心持を、若木の櫻に代つてうたつたのです。これはすべての日本の少年が持つべき誇ではありませんか。

私も憚りながら櫻かな

皆さんはこの俳句を、大きな聲で誰の前ででも、うたつていゝのです。

―（一茶さん）―

二葉亭四迷
本名は長谷川辰之助、東京市の人、小說家、明治四十二年歿、年四十六。

けたゝましい　聲尻

三　ポチ

二葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけて、憶ひ出すのはポチのことだ。

忘れもせぬ、春雨のしと〳〵と降る、薄ら寒い或夜の事であつた。私は例の通り、宵の口から寢てしまつたが、ふと目をさますと、遠くで微かにきやんきやんといふやうな聲がする。不思議に思つて耳をすましてゐると、次第に大きく高くなつて、つひには確に門前に聞える。疑もなく小犬の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたゝましくきやんきやんと啼きたてる。其の聲尻がかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い遠い處へ消えて行く。と思へば、忽ちに又近くで堪へきれぬやうに啼出して、くん〳〵と鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

めいる
欠伸
馴染
いたいけな

二葉亭四迷

私は元來動物が好きで、わけても犬は大好きだから、近處の犬は一匹もない筈だ。不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出すと、

「どうかしたの。寢られないのかえ。」

大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは

と、母が寢返りを打つて、こちらを向いた。私は此の返答はさし措いて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて……誰かが棄てて行つたのさ。」

「誰が棄てて行つたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

「どうして棄てて行つたんだらう。」

母は何處までも相手になり、其の意味を說明してくれて、

「もうおそいから默つておやすみ。」

と、優しく言つてから、彼方を向いてしまつた。

私も亦夜著を被つた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍、遠くなる。寢られぬまゝに、私は夜著の中で、今聽いた母の說明を繰返し繰返し味はつて見た。先づ何處かの飼犬が緣の下で兒を產んだとする。小さなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて、みい〳〵と乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、その側へどさりと横になり、片端から抱へこんで、ぺろ〳〵舐めると、小さいから舌の先でたわいもなくころ〳〵轉がされる。轉がされては大騷ぎして起返り、又よち〳〵と這寄つて、ぽ

つちりと黒い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探りあて、あわてゝてちゆうと吸附いて、小さな両手で揉立て揉立て吸出すと、甘い温かな乳汁が滾々と出て來て、咽喉へ流込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割込んで來る。とられまいとして産毛の生えた腕を突張り、大騒ぎをやつてみるが到頭とられてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸

あわてる
滾々
産毛

犬　ころ　（圓山應擧筆）

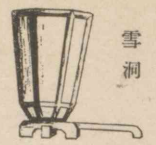
附く。其の中にお腹が一杯になり、親の肌で身體が温つて、融けさうな好い心持になり、ついうと〳〵となると、含んだ乳首がぬけさうになる。夢心地にもあわてゝ又吸附いて、一しきり吸立てるが、ぢきに又たわいなくうとうととなつて、乳首がつひに口をぬける。ぬけても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。其の時、忽ち暗闇から大きな腕が、ぬつと出て、正體なく寢入つてゐる所をむずと引摑み宙に吊す。驚いて目をぱつちりあき、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を突張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息がつまりさうだから、出ようとするが出

正體ない

足掻　られない。しばらく藻掻いてゐる中に、ふと足掻が自由になる。と、襟元を摑まれて高い高い處からどさりと落された。うろ〳〵として、そこらを見廻すけれど、何だか茫然　變な寂しい眞暗な處で、誰もゐない。茫然としてゐると、濡れしよぼたれる　雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、怖ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よち〳〵這出し、雨の夜半を唯ひとり、溫かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼き廻る。それがさつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、何時か又戻つて來て、何處をどう潛りこんだのか、今は泣聲が正しく玄關先に聞える。

居たたまらない

雪洞と颯



雪洞

「お母さん、お母さん、門の中へ這入つて來たやうだよ。ようお母さん、行つて見よう、よう。」

私は何だか居たたまらないやうな氣になつて、又母に言ひかけると、

「本當に仕樣のない兒だねえ。」

と口小言を言ひ言ひ、母も澁々起きて、雪洞を點けて立上つたから、私も其の後について玄關へ出た。戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がちら〳〵と靡く。其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を飛び退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の闇を破り、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長

なり

況や

く照らし出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も經たぬ、むく〳〵と肥つた、赤ちやけた小犬が、小指ほどの尻尾を千切れさうに掉立てて、此方を見上げてゐる。なりは私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を滴らせ、ぽつちりと二つの眼を青貝のやうに竝べて光らせてゐる。

「おや〳〵、まあ、可愛らしい。」

と、母もつい言つてしまつた。況や私は犬好きだ。じつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

すると、さほど怖れた様子もなくちよこちよこと側へ來て、頭を撫でてやる私の手をぺろ〳〵舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い足を擧げて、ばた〳〵やつてゐたが、果はやんはりと、痛まぬほどに小指を咬む。

私は可愛くて可愛くて堪らない。母の顏を見上げて、

「お母さん、何かやつて。」

「やるのも好いけれども、居附いてしまふと仕方がないからねえ。」

と、口では拒むやうなことを言ひながらも、臺所へ行つて、缺けた茶碗に冷飯を盛り、何かの汁を掛けて來てくれた。

早速吝脫へ引入れてこれを當てがふと、小犬は一寸匂

を嗅いでゐたが、すぐ甘さうにぴちやぴちやと舐めだした。汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくしんと嚔をする。忽ち汁を舐めつくして、今度は飯にかゝつた。飯はまだ食べなれぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんなことではなか〳〵取れない。果は前足で口の端を引掻くやうな眞似をして、大藻掻きに藻掻く。

此の隙に、私は母と談判を始めて、

「今晩一晩泊めてやつて。」

と、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もうかうなつては仕方がない。澁々棧俵法師を捜して來

澁る

うんざりする

て、沓脱の隅に敷いてやつた。が、其の晩一晩啼き通されて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌ひの父は、泊めた其の夜を啼明かされると、うんざりしてしまつて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は小犬を抱いて逃げ廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、しかしそれも一時のことで、其のうちに、小犬も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなると、逐出す筈のものに、何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

犬好きは犬が知る。私のポチを愛する心はポチにも

渾然一如
一目散

自然に通じてゐたらしい。其の證據には犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもしないで行つてしまふことがある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて眼を輝かして飛んで來る。しかし、唯それだけのことで、其の時のポチは矢張犬に違ひない。其の犬に違ひないポチが私に對ふと犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか、どつちだかそれは分らぬが、とにかく互に人畜の差別を拂ひ棄てて、渾然として一如となる。

ポチは朝起きだから、私が起出る時分には疾くに朝飯も濟んでゐて、私の聲を聞きつけると、何處にゐても一目

散に飛んで來る。急いで庭へ降りると、ポチがすかさず泥足で飛附く。細い人蔘ほどの赤ちやけた尻尾を懸命に掉立てて、嬉しさうに面を見上げる、見おろす。目と目とぴつたりと合ふ。堪らなくなつて、私が横抱きに引抱く。ポチは抱かれながら、身を藻掻いて、大あばれにあばれ、私の手を舐め、胸を舐め、頸を舐め、頬を舐める。父が面を顰めて汚い汚いと言ふ。考へて見れば汚いやうではあるけれども、しかし、私は嬉しい、やめられない。母は毎朝これでは著物がたまらないとこぼすけれど、著物なんぞの汚を厭つてポチの此の志を無にすることは出來る話ではない。

四　加藤清正と熊本城

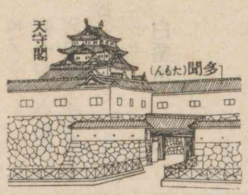
大類　伸

大類　伸
東京市の人、歴史家、文學博士、東北帝國大學教授、帝國學士院會員、明治十七年生。

加藤清正
尾張國（愛知縣）の人、豐臣秀吉の臣、慶長十六年（三七一年）歿、年五十、熊本城は慶長六年にその築きしもの、封建時代憚悍

熊本城は、かの勇猛無比の武將として知られた、加*藤清正の築いた天下の名城である。凡そ城郭に堅牢堅固でないものはないが、熊本城の如きはその特に著しいものである。さればこそ封建時代の遺物でありながら、なほよく明治十年の役に憚悍比なき薩摩男子の軍を引受けて、籠城の目的を達し得たのである。

熊本城は丘陵の一角に築かれたもので、坪井川と白川との流を天然の濠としてゐる。隨つて城濠の見るべきものは少ないが、その屈折を極めた高い石垣は確に一偉



名古屋城
慶長十五年（三七〇）建造。

加藤清正　（小堀鞆音筆）

觀で、かの名*古屋城の天守閣の築造者として知られた清正が築いたに背かず、流石に堂々たるものである。

城内の通路の複雑なことや、屈折をなしてゐることも、やはり防備に注意した結果である。しかし、天*守閣をはじめ、數多の櫓や多*聞長屋の建築などは、極めて質素なものである。名古屋城は、五層の大天守閣が全部白壁で、壯麗な美觀を發揮してゐる上

に、燦として尾陽の空に輝く金の鯱（しやちほこ）によつて、益〻その名を天下に謳はれてゐるが、熊本城の建築はこれに反して極めて見すぼらしい。その建物は黒い板張の建築で、本邦城郭の特色とも言ふべき白堊造ではない。またその屋根の工合なども住宅建築に似たもので、城郭の壮麗を誇るべき外觀は備へてゐない。

熊本城

さはれ、城郭の價値は實用にあつて外觀にはない。壮麗な威容も結構ではあるが、實戰に役に立たなくては何にもならぬ。熊本城は質素である。恰も、風采の揚らぬ野武士のやうな趣がある。しかし、實用の點には十分注意が届いてゐて、外觀は粗末でも、銃眼その他側防や俯射の設備に缺けた點はない。唯惜しいことには、天守閣の建物が燒けてしまつた爲に、今日では、その石垣が殘つてゐるに過ぎない。

白堊造

さはれ

威容

野武士

銃眼

床几

岡山城
天正元年（一五七三）宇喜多直家の建造にかゝる。

熊本城の建築が黒い板張であるのは、敵の目標となることを避ける爲と思はれる。岡*山城の天守も板張で黒い所から、昔から烏城と稱せられてゐるが、熊本城の如きは、岡山城よりも更に烏城である、と言つてもよろしい。壮麗な名古屋城を、緋縅の鎧を著て床*几に腰打掛けた

陣頭

面影
髣髴

民政

肥後
熊本縣。

灌漑

大將に見立てるならば、熊本城は卽ち黒革縅の鎧に身を固め、大身の槍を小脇にして、馬を陣頭に進めた百戰錬磨の勇士である。この點に於て、熊本城は確にその建造者たる清正の面影を髣髴せしめるものと言つて宜しい。

質素儉約、しかも武備は一日も忽せにせぬ。これこそ實に清正と熊本城との一致する點である。

しかし、清正は決して武勇一片の大將ではなかつた。人情に厚く、殊に領内の民政には一方ならぬ功績を擧げてゐる。城の濠となつてゐる坪井川や、その他肥後の四大川と言はれてゐる球磨川・綠川・白川・菊池川に大工事を施して、水運を便利にして船の通路を開き、また灌漑の便

開墾

本丸

出來よう

を計つて新しく田地を開いたことも、一再ではなかつた。そしてこれ等の大工事は、後世に非常な恩惠を遺したもので、肥後平野の開墾は、實に朝鮮八道に鬼上官の名を謳はれた猛將清正に負ふ所が多いのである。また熊本城は別名を銀杏城とも呼ばれてゐるが、これは清正の植ゑた銀杏樹が本丸にあるからである。清正が試みた河流の護岸工事は堅固を極めたもので、後年大洪水でその石垣が崩れた時、更にその下に一重の石垣のあることが發見された。萬一の際を慮つて、二重の石垣が築いてあつたのである。これによつても、用意周到な清正の面目を察することが出來よう。

熊本城が質素で實用に缺けた點のないことも、やはり清正の事業としてふさはしいことと肯かれる。俗謠に「敵にかたうの城の主」と謠はれた清正は、戰場に馳驅する以外に、なほ上述の如き眞面目を發揮したのである。

ふさはしい

垂楊

嗚呼、堅城黑く垂楊蒼き熊本の町。時代がいかに推移しようとも、城郭の上に現れた清正の精神は永へにその價値を失ふものではない。熊本の人士が清正の人物を慕つて止まないのは、誠に當然のことであらう。否、それは熊本の人のみでなく、日本全國の人皆然りであらう。名古屋人が名古屋城を自慢するやうに、熊本城は確に熊本の一名物である。

—(史蹟めぐり)—

五　二宮尊德翁

福住正兄

翁*曰く、「不幸にして十四歲の時父に訣れ、十六歲の折母に訣れ、所有の田地は洪水の爲に殘らず流失し、幼年の困窮艱難實に心魂に徹し、骨髓に染み、今日なほ忘るゝ事能はず、何卒して世を救ひ國を富まし、憂瀨に沈む者を助けたく思ひて勉強せしに、圖らずもまた天保兩度の飢饉に遭遇せり。こゝに於て心魂を碎き、身體を粉にして、弘くこの飢饉を救はんと力めたり。その方法は、本年は氣候惡し、凶歲ならん、と思ひ定めたる日より一同申し合せ、非常に勤儉を行ひ、固く飲酒を禁じ、斷然百事を拋ちて、その

福住正兄　神奈川縣の人、二宮尊德の高弟、明治二十五年歿、年六十九。

翁　二宮尊德、相模國(神奈川縣)の人、經世家、安政三年(三五六)歿、年七十。

心魂
骨髓
憂瀨

力む

拋つ

晩　おそ
干田　ひでん
元肥　もとごえ
培養　ばいやう
植ゑ　うゑ
兆　きざし

用意をなしたり。その順序は、まづ申し合せて、明地・空地を開き、木綿畑を潰して、馬鈴薯・蕎麥・菜種・大根等の食料になるべき物を蒔きつくる手配を盡し、土用あけまでは隱元豆も遲からねば、晩の種を求めて多く蒔かせ、それより早稻を刈取り、干田は耕して麥を蒔き、金錢を惜しまず元肥を入れて培養し、それより、畑の菜種の苗を抜きて田に移し植ゑて、食料の助とせり。此の如く、その土地土地に於て油斷なく勉強せば、意外に食料を得べし。凶作の兆あらば、油斷なく食料を求むる工夫を盡すべし。」と。

川久保民次郎といふ者あり、翁に僕たり。國に歸らんとして暇を乞ふ。翁曰く、「それ空腹なる時、他に行きて、『一

たまはれ　振舞ふ
進ず　序

飯をたまはれ、予庭を掃かん。』といふとも、決して一飯を振舞ふ者あるべからず。空腹を堪へて、まづ庭を掃かば、或は一飯にありつく事あるべし。これ己を捨てて人に隨ふ道にして、百事窮しても亦通ずべき道なり。我、若年始めて家を持ちし時、一枚の鍬損じたり。隣家に行きて、『鍬を貸したまはれ。』といひしに、隣翁曰く、『今この畑を耕し、菜を蒔かんとする所なり。蒔き終らざれば貸し難し。』といへり。『我、家に歸りても別になすべき業なし。この畑を耕して進ずべし。』といひて耕し、『菜の種を出されよ、序に蒔きて進ぜん。』といひて蒔きしに、隣翁喜びて鍬を貸し、尚曰く、『鍬に限らず、何にても差支の事あらば、遠慮なく申され

よ。必ず用立つべし。』といひし事ありき。此の如くすれば、百事差支なきものなり。汝國に歸り、新に一家を持たば、必ずこの心得あるべし。夜々いぬる暇を勵まし勤めて、草るも障りなかるべし。又、汝今壯年なり、終夜いねざ鞋一足或は二足を造り、開拓場に持出し、草鞋の切れ破れたる者に與へんに、受くる人禮せざらんとも、もと、いぬる暇にて造りたるなればその分なり。禮をいふ人あらば、それだけの德なり。又、一錢半錢を以て應ずる者あらば、これ亦一際の益なり。よくこの理を感銘し、連日怠らずば、何ぞ志の貫かれざる理あらんや。我幼少の時の勤、この外にあらず。肝に銘じて忘るべからず。」と。（二宮翁夜話）

いぬ　開拓場　與へんに　その分　感銘

六　菖蒲の節句

島崎藤村

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな、宗教の意味のある祭日ではないまでも、一年に二度の節句の祝が、たゞたゞ幼い者のためにあるのは嬉しい。女の兒のために桃の節句、男の兒のために菖蒲の節句があるのは嬉しい。

五月人形の多くが武勇を誇とした舊い時代からの遺物であるといふやうな、さういふ理窟は拔きにしたい。そこに飾られる一切のものは皆、玩具である。あの三月の節句に取出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古

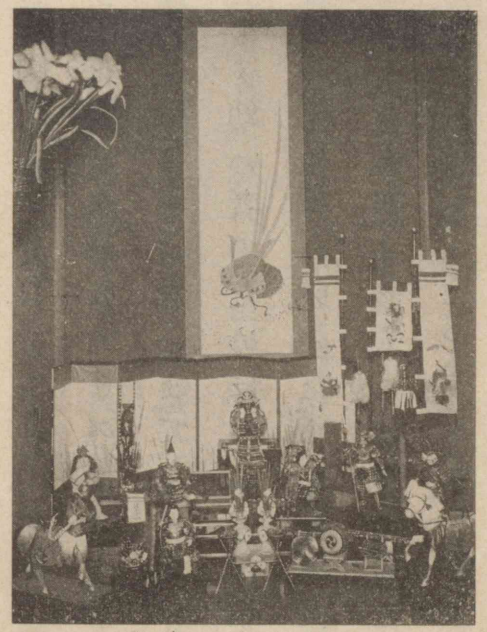
島崎藤村　名は春樹、長野縣の人、詩人、小說家、明治五年生。

卯月　クリスマス　遺物　理窟

鍾馗

やう

風な少年音樂隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節句を祝ふためにあるものは鍾馗や鬼や金時や桃太郎などの行列だ。五月の空に高く飜る鯉幟は、恰も子供の國をそこに打建てたかのやうにも見える。狹苦しい町の中にあつても、あちこち屋根の上に鯉幟を望むのは樂しい。眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悅ぶ子供



五月節句の床飾

飛揚

情調

迎へる

滿天皇

の心を樂しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供の心に返すものは、あのはたゝ〳〵と風に鳴る鯉幟の音である。五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒にふく菖蒲までがお伽話の情調を誘ふのもなつかしい。

五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。桃や櫻は過ぎさり、椿や木蓮にも遲く、山吹や藤や滿天星（どうだん）などの花が香氣を放つ五月の初は、一年のうち最も樂しい季節の一つだ。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば袷では寒いこともあるが、私達の周圍は最早若葉の世界だ。この好い時候に、樂しい菖蒲

の節句がやつて來る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も好い。爽かでみづ〳〵しい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯が立つて、あの香氣が人を醉はせるばかりでなく、私達の身をも心をも溫めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中をかきわけて、湯槽に浸るのも樂しみだし、あの葉が私達の肌などへ、べつたりと附いた時の心持も惡くない。

粽（ちまき）の香りは幼い日の香りである。粽ばかりは鄙びた

ふさはしい
おのづから
爽か
みづ〳〵しい
湯槽
粽

ところで造られるものほど好い。あの細長い粽の葉の卷きつけてあるのを解いて、青色に蒸された香りを嗅いだ子供の頃の心持は、いまだに忘れられない。粽の外に、柏餅・赤飯などと數へて來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしに懷かしい思を誘はないものはない。私達の少年時代は、まだ軒の菖蒲にも殘つてゐるやうな氣がする。

何がなしに

—（藤村讀本）—

高濱虛子　名は淸、愛媛縣の人、俳人、明治七年生。
湖水　琵琶湖。
部屋　比叡山延曆寺東塔の宿院。
雲海
鉾
近景
遠景

七　比叡の鳥

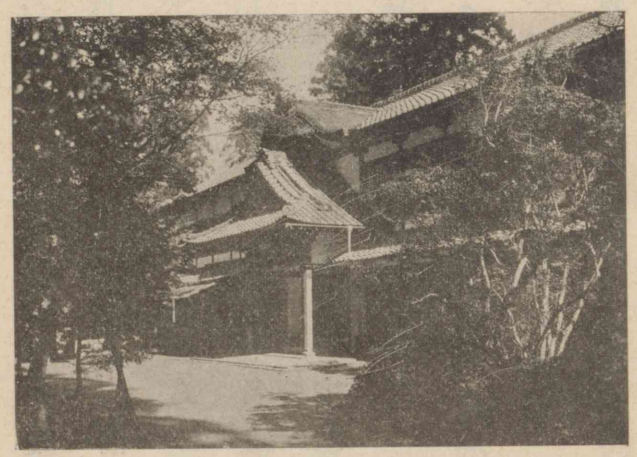
高濱虛子

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が一杯にはいつてゐる。

湖水と思はれる邊は雲ばかりで、何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつてゐるので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢がさながら鉾のやうに突つたつてゐる。左手には北谷の向うに當る森が、鋸の齒のやうな杉を背に竝べて湖の方に流れてゐる。空氣がいやが上に淸いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、ともに新鮮な色を

うき世
我が物顏
かはいゝ
答へる

してゐる。さうして、その間を薄い霞が流れてゐる。



比叡山の宿院

非常に靜かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地を我が物顏に鳴き囀つてゐるのは小鳥だ。何といふかはいゝ聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが殘念だ。その杉の梢で一羽が鳴いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。よく耳を又遙か向うの谷深く他の一羽が應じてゐる。

合奏
高音を張る
りゝしい
殖える
錯綜
諧調
急調

すますと、なほ二三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ。

この小鳥の合奏を破るやうな別な聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥程優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、その聲の空山に響く趣が何とも言へぬ。これも名は分らぬ。それも一羽ではない、三羽・四羽と段々聲の主が殖えて來る。前の小鳥が縱絲なら、この小鳥は橫絲だ。互に錯綜して、よく諧調を保つところが面白い。

突然、けん〳〵とけたゝましい音が谷を橫ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥でもあらうか。前の二つ

の小鳥で織りなした美しい絹を、唯一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとの靜かさになる。

眞先にその靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、また縱絲を織つて前の小鳥が鳴く。橫絲を織つて次の小鳥が鳴く。絣が鳴く。縱絲が鳴く。橫絲が鳴く。この

比叡山より琵琶湖を望む

鰐口

高調
低調
啄木鳥
漠々

絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待設けてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといつた。二人の小僧は山鳩だらうといつた。

湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つてゐる。杉の梢を渡る霧は少しづゝ薄らいで、だん〳〵と谷が深く見えて來る。

（新寫生文）

島木赤彦
本名は久保田俊彦
長野縣の人、歌人
大正十五年歿、年五十一。

ゆゑ。

風情

八新涼

一

島木赤彦

金魚賣の呼聲が聞えると、新涼先づ動くといふ感がする。私の居村は信州の山中ゆゑ、金魚賣の來る頃は櫟林も芽ぶかず、庭さきの柿も芽ぶかず、櫻の葉がやゝ伸びて、散殘りの蕚がなほ殘る頃であつて、晴れた朝は桑畑や庭に霜が見え、家の中には炬燵があり、春といへば春、夏といへば夏ともいへ、それで冬の風情も幾分殘つてゐる

島木赤彦

おとづれる

さすがに

といふ頃である。さういふ山村へ金魚賣の呼聲がおとづれて來るのであつて、その聲を聞くと、夏の心先づ定つて、やがて新涼の動くといふ感がするのである。金魚賣の笠は白くて大きい。それほどの大きさの殘雪は、村近い山の上にも、とぼ〳〵見えてゐる。村の木立はさすがに多く芽をふいてゐる。その中を金魚賣は聲を張上げながら、靜かに歩いて行く。

その聲がすると、田舍の村落が餘計にひつそりとおちつくのである。

金魚賣につゞいて來るのは若布賣である。これは多く越後の女であつて、赤い襷に紺の脚絆をはいて、はるばる信州路にやつて來る。信州ばかりではない。甲州から關東までも渡つて歩くと聞いてゐる。女の身そらで旅から旅を渡り歩くのは、燕の渡り歩くよりもしをらしい。

身そら

しをらしい

清爽

風味

添へる

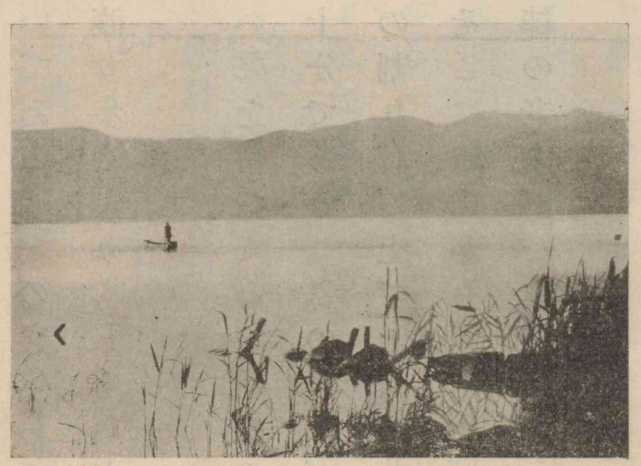
金魚賣も、若布賣も大抵美しい聲を持つてゐて、新綠の山家に清爽の風味を添へるに十分である。私の村はづれに石割り工事があつた。その割り石の上で、二人の若布賣が辨當をつかつてゐた。その割り石の上で、二人の若かりの清水が流れて居り、信濃柿の老木が一本立つて、いさゝかの蔭をなしてゐた。

二

葭切

饒舌る

私の村は一方は諏訪湖に續いてゐる。湖水ばたの青葭が四五寸伸びると、もう葭切が來て鳴いてゐる。毎年のことであるが、早いといふ氣がする。葭切の聲はいかにもみづみづしい。聲全體が水だといふ感じである。葭切の鳴くのは、鳴くといふよりも囀る、囀るといふよりも饒舌る（しゃべる）といふ方が當つてゐる。それで朝から晩まで、月があれば夜までも、饒舌りつゞける。このおし



諏訪湖

稚葉

郭公

やべりは、饒舌れば饒舌るほど不思議に湖水がひつそりし、村落がひつそりする。新涼の一とすべきである。

私の村は、又一方山につゞいてゐる。櫟の稚葉がまだ白く、山吹が咲殘つてゐる頃から、郭公が鳴きはじめる。郭公の聲は人を呼ぶに似てゐる。餘り明瞭に人語に類するから、初めて聞く人は驚くかも知れぬ。毎年聽いてゐると、又來たなと思ふ親しさがあり、新綠の野山にあまねきを思はしめる爽かさがある。

（アラヽギ）

九　御親閲をお受けして

御親閲　天皇陛下の御親閲をお受けいたしました。

浄―清　眞清水で洗ひ浄められたやうに澄みきつた私の胸に、先づ思ひ浮べられたのはお祖父さまの事でございます。

聽く―聞く　私がまだ幼くて、お祖父さまのお膝の上に乘つかつてゐた時分に、よくお聽きしたお祖父さまのお言葉を、私は今でも、はつきり覺えて居ります。

覺え。　「お天子さまを拜むと、目がつぶれてしまふ。」

懷かしいお聲は親しく耳もとに響いて來るやう

でございます。

だのに、お祖父さま、私はお天子さまの御親閲をお受けする事が出來たのでございます。咫尺の間に萬乘の大君を拜し奉る事を得たのでございます。

そんな畏れ多い事がと、お祖父さまはおつしやるでございませう。本當に、私自身でも銃劍と銃劍のちらつく間から、尊くも龍顏を拜しまつつたあの瞬間は、夢ではなかつたらうかと思はれてならないほどでございます。

六月五日、私たち關西の若人は、大阪城東練兵場に集つて、靜かに陛下の行幸をお待ちして居りまし

咫尺の間

萬乘の大君

龍顏

六月
昭和四年。

聞えて

濛々

玉座

た。午後二時ごろでしたらうか、軍樂隊の奏する君が代が聞えてまゐりました。

陛下がお著きになつたのでございます。

いよ〳〵分列式が始りました。十一萬の大人數が、銃劍をきらめかしながら、濛々たる砂煙をあげて、次々に前進します。やがて、私の隊も「前へ」の號令と共に、力强い第一歩を踏みだしました。蒸暑い曇つた空からは、いつか雨が降つてきました。

隊が玉座に近くなつた時です。「頭右」の號令がかかりました。私たちは一齊に頭を右に向けて、龍顏にしつかり注目いたしました。

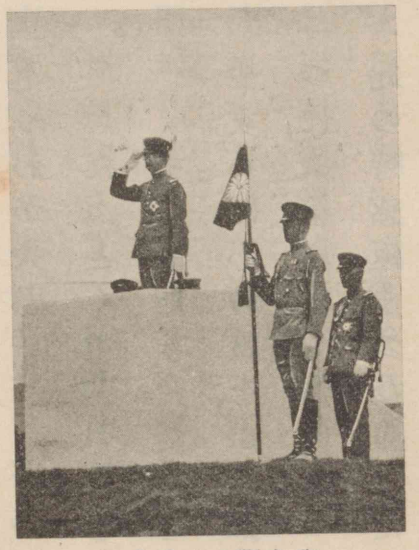
勿體なく

擧手の禮

無我夢中

陛下は雨具もお召しにならず、玉座に直立不動のお姿勢で、お立ちになつていらつしやいます。そして、勿體なくも私たちに擧手の禮を賜うたのでございます。

あゝ、此の時の私の氣持はどう言つて好いかわかりません。



御親閲の聖上陛下

私はたゞ無我夢中で歩いてゐました。

わが大君

わが大君

日の本の少女たちの歌聲は、やがて風のやうに起り始めました。

わが大君
わが大君
たふとくも　いまし
まのあたり　たゝせたまへり

少女らは心の誠を、ふるふ聲にうちこめて、調べを一つに、次第に高らかに、たゝへゆきました。

此の時、感極まつた赤子たちの嗚咽の聲が、幽かに聞えてまゐりました。

私は靜かに瞑目いたしました。かたじけなさに

たぷとし
たゝへる
嗚咽の聲
瞑目

溢れる熱涙は、兩頰をしとゞに濡すのでございました。

そして心の中に、悠久三千年の國史が、まざ〳〵と照り輝いてきました。

建國の當初から、脈々として我が民族の胸底深く流れ來たつた偉大な精神は、今こゝに其の高い姿を顯示してゐるのでございます。

お祖父さま。私は日本人のまことの生命を、此の事實のたゞ中にあつて、初めてしみ〴〵と感得いたしました。

尊く懷かしい我が日の本のみ國の姿よ。

お祖父さま。あなたの今までの永い御生涯の間

悠久
脈々
顯示
感得

に、恐らくは一度も夢にすら御覽になつたことも無
いでせうと思はれますやうな、此の光榮に浴するこ
との出來た私は、なんといふ幸福な者でございませ
う。私はなんといふ有難い大御代に生れあはせた
のでございませう。
ではお祖父さま。此の喜びをお知らせいたしま
すと同時に、お祖父さまとも〳〵に叫びませう。
我が大君の彌榮を
我が日の本の彌榮を

彌榮

山村暮鳥
本名は土田八九十
詩人、大正十三年
歿、年四十一。

言ひ。

一〇　美しい日本

日本。うつくしい國だ。
葦の葉つぱの朝露がぽたりと
おちてこぼれてひとしづく、
それがこの國となつたのだとでも
言ひたいやうな日本。
大海のうへに浮いてゐる
かはいらしい日本。
うつくしい日本。

山村暮鳥

小さな國だ。
小さいけれど、
その強さは鋼鐵のやうな精神である。
おゝ、日本。
ぴち〳〵してゐる魚のやうな國。
勇敢な日本。
古い日本。
その霧深い中にとぢこもつて、
山鳥の尾のなが〳〵しい夢を見てゐたのも、
今はもうむかしのことだ。

目をあけて、
そこにどんな世界をお前は見たか。
日本、日本。
お前のことをおもふと、
この胸が一ぱいになる。
お前は希望にかゞやいてゐる。
お前は力に充ち滿ちてゐる。
そして眞劍だ。
だが日本よ、

平坦

お前の道はこれまでのやうに
もうあんな平坦なものではあるまい。

孤獨

お前はよるひる絶えず
お前のまはりに打寄せてゐる
その波の音をなんときいてゐるか。
寂しくないか、
おゝ、孤獨な

黎明

遠い一つの星のやうな日本。
からりとはれた黎明の天空のやうな國。
ときゞ〳〵は通り雲の

泥をぬる

さつとかゝるくらゐのことはあつても、
お前はたゞの一度でも
その顏面に泥をぬられたことがないんだ、
そんな美しい國なんだ。

日本。
幸福な日本。
強い日本。
わたしらはこゝで生れたんだ。
またこゝで最後の息をひきとつて、

遠祖
墳墓の地
すこやか

遠祖（とほつみおや）らと一緒になるんだ。
墳墓の地だ。
靜かな國日本、
小さい國日本、
つよくあれ、
すこやかであれ、
驕るな、
日本よ、眞實であれ、
ばかにされるな。

（少年倶樂部）

小笠原長生
佐賀縣の人、海軍中將、宮中顧問官、子爵、慶應二年（一八六六）生。
いくそたび……
幕末の歌人八田知紀の和歌。
金甌無缺
御稜威

一一　皇天の加護

小笠原長生

*いくそたびかき濁しても澄みかへる水やみくにのすがたならん

古來、我が國が幾度か國難に直面しながら、少しも國威を損ずることなく、悠々三千年の金甌無缺の國體を保ち來たつたのは、上は天皇の御稜威、下は我が忠良なる臣民の力によること勿論ながら、實に此の天祐神助の賜物でなくして何であらう。卽ち、上は天照大神より歷代の皇祖皇宗を始め奉り、八百萬の神々が、常に我が國を加護あらせられてゐるからではないか。

文永の役　文永十一年（一二七四）蒙古來寇す。
弘安の役　弘安四年（一二八一）蒙古再び來寇す。
國運を賭す
寛政　光格天皇の御代。（一七八九―一八〇一）。
桃源の夢
林子平　名は友直、志士、寛政五年（一七九三）歿、年五十六
外夷

彼の文永・弘安の兩役は固より、近くは日清・日露の二大戰役に至るまで、何れも我が國運を賭した國難であつたにも拘らず、よく皇土の全きを致し、其の都度一層の盛運を齎すに至つたのは、決してたゞ事ではあるまい。

併しながら、こゝに皇天の加護といひ、天祐神助といふも、其の解釋に至つては、私は一部の世論と些か趣を異にするものである。

寛政の頃、桃源の夢遂に破れて、北邊漸く急を告げ來たつた時、仙臺藩士林子平が率先して當局に向ひ、海軍充實の急務を叫んだ。併し、時の幕府を始め世人の多くは、「外夷何ぞ恐るゝに足らんや。我が神州には伊勢の神風の

擁護　ヨウゴ
撫然　ブゼン
揶揄　ヤユ
東鄕元帥　名は平八郎、鹿兒島縣の人、侯爵、昭和九年歿、年八十八。

擁護がある。夷船海を埋めて襲ひ來たるとも、神風直ちに起つてこれを打沈めてしまふであらう。」と稱して、更に子平の說を顧みようともしなかつた。これに對して、子平は撫然として、「たゞ坐して神風を待たんとするか。」と揶揄したことは有名な話である。

誠に子平の言葉の如く、努むべきを努めず、爲すべきを爲さずして、たゞ徒らに天祐を待ち、皇天の加護を祈ることは、實に謬れるも甚だしいといはねばならぬ。若しかくの如くして、天祐を得んとするならば、所謂木に緣つて魚を求むるよりも更に甚だしい愚といふべきである。

東鄕元帥は常にいふ。「天は必ず正義に與し、神は必ず

換言（カンゲン）

遭遇（ソウグウ）

就中（ナカンヅク）

至誠に感ず。」と。實に至言である。これを換言すれば、天祐を得る道は、常に正義と至誠との二つでなければならぬ。此の二つを以て一貫すれば、いかなる困難に遭遇しても、そこに必ず天祐のあることは毫も疑ないのである。元帥は更にいふ。「天祐は必ずある。若しこれが無いとすれば、それは未だ此方の至誠が足りないからである。」と。換言すれば、至誠ある處必ず神助あり、正義ある處必ず天祐を伴なふといふのである。

我が國の世界に誇るべきことも多々あらうが、就中我が國三千年の歴史が、常に光輝ある正義と至誠とに滿たされてゐるといふことが、其の主なるものの一つでなければならぬ。隨つて、いかなる國難にも天祐が影の形に添ふやうに伴なつて、我が國を磐石の安きに置いてゐるのである。

我が國は、正義と至誠とによつて立つ國であると共に、又天祐の國である。これに關して、最も具體的な實例たる日本海大海戰の場合に就いていつて見たい。

當時我が將士は、世界の最強國たるロシアを敵としてゐるだけに、既に戰前からひたすら君國のため盡忠報國の至誠を以て、訓練に訓練を重ね、一日として怠らなかつたのである。しかも、愈、大海戰の當日となるや、「天氣晴朗

ひたすら

艤艫照準

感應

なれども浪高し。」と、東郷司令長官の報告にある通り、激浪のため彼我の艤艫は頻りに動搖して、照準を定めるに非常な困難を覺えたのであつたが、それがために敵の放つ砲彈は大概中らなかつたに反して、我が砲彈はよく敵艦に命中して、我が將士の熟練せる技能を十分に發揮することが出來たのである。

これは正に天祐である。卽ち至誠の賜物に外ならなかつたのである。加之（しかのみならず）、我が國には東洋の平和を維持せんとする正義があつたのである。此の正義が感應して皇天の加護があつたのである。

此の事實は一面又、「天は自ら助くる者を助く。」といふ西諺の眞なることをも教へるものである。

こゝに於て、吾人は我が國が天祐の國である事よりも、寧ろ正義の國、至誠の國である事を誇りたいと思ふ。

我が國民が、常に上御一人の大御心を體し、至誠と正義とを以て內外に處するところがあるならば、そこには必ず天祐が生れ、神助が降り、國家の盛運は愈〻期して待つべきであらう。私はかく信じて疑はぬものである。

（修養全集第十二卷―日本の誇）

一二　木のぼり

前田夕暮
名は洋三、神奈川縣の人、歌人、明治十六年生。

織細

青桐の幹は青くてすべ〳〵してゐる。まして二十年生くらゐの若木の快い幹の肌ざはりは、冷たくて、たつぷりと水をふくんでゐる。樹皮をすかして青い纖細な神經が感じられるほどである。

私の子供がその青桐の木に登らうとしてゐる。子供は全身的に幹に抱きついて、背をまろくして三四尺ほどやつとのことで登る。若木の青桐は空にひろげた若葉を、梢の方でぴり〳〵と輕くふるはしてゐる。

子供は顏を眞赤に染めて瞳を黒く光らせながら、また

五六尺のところまで登つて暫くじつとこらへてゐたが、するく〳〵とすぐに滑り落ちてしまふ。

子供は滑り落ちてしまふと、暫くの間は胸を小鳥のやうにふくらませながら、樹を高々と仰いでゐる。

子供は意を決するもののやうに、上着を地面に投げつけて、今度は勢ひ猛に登りはじめる。兩手でしつかり樹を抱きしめて靴の踵を樹の肌につけて、遮二無二登つて行く。が、子供の體は二尺登つては一尺ずりさがり、三尺登つては二尺ずりさがる。そして五六尺の高さまで行つて力が盡きたのか、またするく〳〵と地上に滑り落ちるのである。

遮二無二

造作

もうあきらめてやめるだらうと思つて、私は少し離れたところから見てゐると、子供は靴をぬいで、一二間さきの方へぽんと投げ出して跣足になつて、足の裏に砂をまぶしつける。そして樹に飛びつくやうに抱きついて、からみつくやうな體のうねりを見せてから、うん〳〵とうめきながら、手も足も眞赤にして登りはじめる。私は見てゐて、少し苦しくなつて來たので餘程とめようと思つたが、それでもと、私までが全身に力をこめて、思はず子供と吐く息吸ふ息を合せた。

子供は忽ち五六尺のところまで登つて、ちよつと考へてゐるやうであつたが、何の造作もなくまたする〳〵と

滑り落ちて、さすがに疲れたと見えて、倒れるやうに地べたに寢そべつてしまつた。そして寢ながら青桐の梢を仰いでゐるのだ。

子供は寢てゐる間にすぐに疲勞を回復したと見えて、忽ち起きあがつて、今度はシヤツもズボンも脫ぎすてて、猿股一つになつて、側においてある支那製の水甕（みづがめ）に片手を入れて、掌で水をすくつて口うつしに飲んだと思ふと、日光の方に向つてふうと霧をふいて腹を大きく膨らませたり低くしたりしてゐたが、また足の裏に砂をまぶしつけて、ちよつと上を仰いで見て、更に勢ひ猛に樹にとびつく。青桐は少しゆら〳〵と搖れる。

今度はみる〳〵間に六七尺ほど登る。第一の下枝が頭のすぐ二三尺上のところにある。子供は滿身汗にまみれ、全身朱に染つて、兩手を長くのばせるだけのばして、幹を抱いたかと思ふと、縮めてゐた足が同時にのびる。と、もう兩手を上にぐつとのばしてゐる。そして下枝に片手をかけたかと思ふと、ひらりと身を跳らせて、その枝の上に立ちあがつた。そして私の方を見おろして「おうい。」と大きな聲をして呼ばつた。「おうい。」と私も思はず手をあげた。

青桐の葉といふ葉は、風にゆられながら日の光を受けて、きら〳〵と喜ばしげに光る。

（綠草心理）

森鷗外

名は林太郎、島根縣の人、醫學博士、文學博士、大正十一年歿、年六十三。

息軒

本名は安井衡、通稱仲平、宮崎縣の人、明治九年歿、年七十八。

一三　大儒息軒先生

森鷗外

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平さんはぶ男だ。」といふ陰言が清武一鄕に傳へられてゐる。

安井息軒

仲平の父は、日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては、宅地を少し離れた所に田畑を持つてゐて、年來、家で漢學を人の子弟に

教へる傍、耕作を輟めずにゐたのである。併し仲平の父は、三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、段々飫肥藩に任用せられるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

輟める―止める
飫肥藩　日向國（宮崎縣）、藩主伊東氏。
小作人

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懷中して畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が始めて藩の教授にせられた頃のことである。十

七八の文治と、十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が皆言合せたやうに二人を見較べて、連があれば、連に何事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻の立派な兄文治と、脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は輕く、弟は重く、弟は大痘痕になつて、剩つさへ右の目が潰れた。父も小さい時疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ不具になつたのを思へば、「偶然」といふものも殘酷なものだといふ外はない。

疱瘡　剩つさへ
殘酷

仲平は兄と一緒に歩くのを、つらく思つた。そこで朝は少し早めに食事を濟ませて、一足先に出て、晩は少し居

さう

残つて仕事をして、一足後れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て、連とさゝやくことは止まなかつた。それればかりではない。兄と一緒に歩く時よりも、行逢ふ人の態度は餘程無遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「見い。今日は猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿引よりはよく讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

狹い土地で、行逢ふ人は大抵知りあつた中であつた。仲平はひとりで歩いて見て、二つの發見をした。一つは、

庇護
渾名
強ひて
金子
藏屋敷

自分がこれまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを悟らなかつたといふことである。今一つは、兄と自分とに渾名が附いてゐて、醜い自分が猿、兄が猿引といはれてゐるといふことである。

安井息軒の住家

仲平はこの發見を胸に藏めて、誰にも話さなかつたが、その後は強ひて兄と離ればなれに、田畑へ往復しようとはしなかつた。

仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から貰つて、清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に著い

自炊
學殖
訂音
古賀侗庵　名は煜、肥前國（長崎縣）の人、德川幕府の儒官、弘化四年（一八四七）歿、年六十。
昌平黌　昌平坂學問所、儒學を專ら教へし江戸幕府直轄の最高學府、今の本鄉區湯島にあり。
註疏
經義

て、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に、大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、「あれでは體が續くまい。」と氣遣ふほどであつた。中一年置いて、二十三になつた時、故鄉の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、とかく病氣で、たうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訂音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後仲平は二十六で江戸に出で、古賀侗庵の門下に籍を置いて、昌平黌に入つた。後世の註疏に據らずに、經義を究めようとする仲平のためには、古賀より松崎慊堂

松崎慊堂　名は復、肥後國（熊本縣）の人、儒者、弘化元年（一八四四）歿、年七十四。
林　德川幕府の儒官、代々大學頭たり。
半折
しのぶが岡　忍岡、下谷區上野の岡の古名、もと此處に聖堂ありき。

の方が懷かしかつたが、昌平黌に入るには、林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舍書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓著に默込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に半折に何やら書いてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

今はねをしのぶが岡の時鳥いつか雲井のよそに名のらん

と書いてあつた。

「や、えらい抱負ぢやぞ。」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍〻氣味悪くも思つた。これは仲平が十九の時、漢學

に全力を傾注するまで、國文をも少しばかり研究した名殘で、わざと流儀違ひの和歌の眞似をして、同窓の揶揄に酬いたのである。

揶揄

侍讀

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にせられた。そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。江戸がへり、昌平黌仕込と聞いて、「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」と評判する鄕里の人達も、痘痕があつて、片目で、脊の低い男振を見ては、「仲平さんは、ぶ男だ。」と陰言を言はずには置かなかつた。

大儒

大儒息軒先生として、その名を知られるやうになつたのは、仲平が四十八の頃からである。

（鷗外全集）

一四　勇ましい朝

千家元麿

千家元麿
東京市の人、詩人、明治二十年生。

朝が來た。朝が來た。
歡ばしく勇ましい朝が來た。
家々は競つて戸を開いて、
美しい光を迎へてゐる。
戸外では寒い風が吹いてゐるが、
喜び勇んだ人々は、
清い空氣の中に飛び出して、
一人一人自分の道を正々堂々と歩んで行く。

迎へ

正々堂々

昇る―登る

夥しい

綠の空は歡ばしく開け、
太陽は光を强めながら、
高く高く昇つて行き、
暖かくなつた地方からは、
威勢のいゝ喜びの聲が、
太陽の光とともに、
だん〳〵强まり高まつて行く。
つめたい風はいつか消えて行き、
明るい歡びは天地にみなぎり、
道行く人は夥しい群となり、

慈愛

人々の顏は輝き、
その眼は美しいものを見てゐるやうに、
麗しく大きく淸らかに見開いて、
深き慈愛あふれ、
希望の方へ勇んで行く。
おゝ、勇ましく美しい朝よ。
太陽はひとしく人々を照らし、
光を喜ばぬ人はなく、
天地は歡喜に燃えてゐる。

―(日本現代名詩集)―

一五　田園日記

中　勘助

中　勘助　東京市の人、小說家、詩人、明治十八年生。

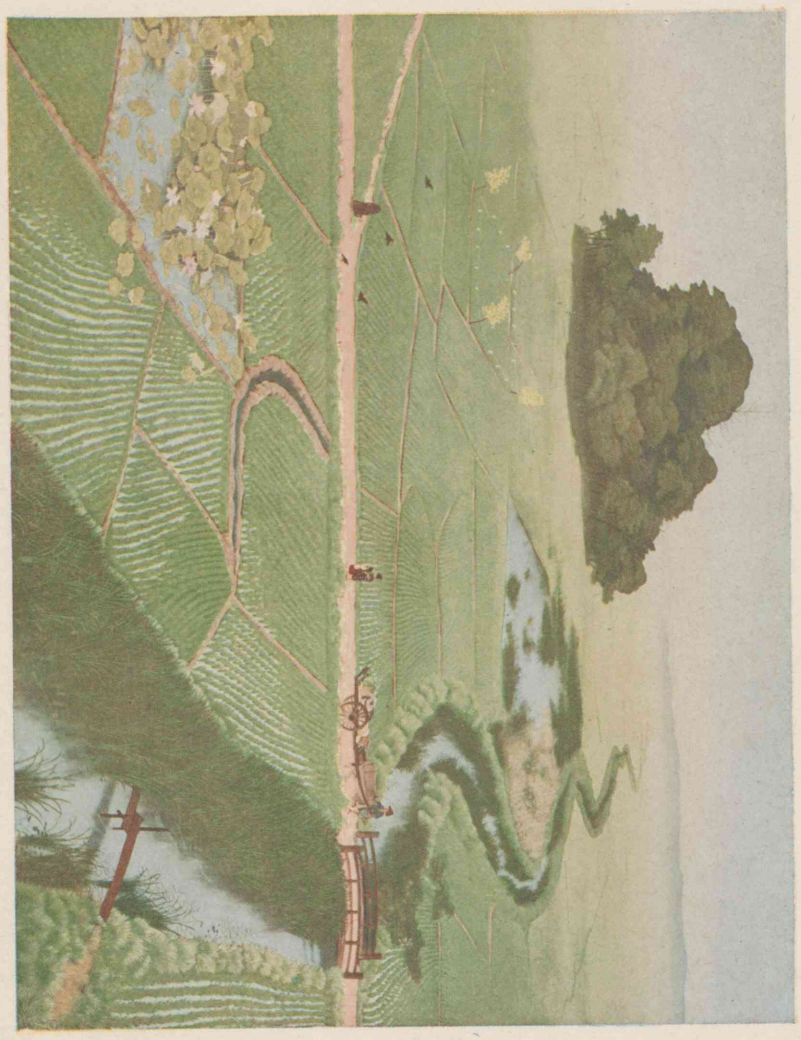
蒸風呂　はひつた
裸足　
野性　
あを。むいて

七月九日。

降るといふほどではなく、ときぐ〳〵小糠雨が降る。汗は流れないが、蒸風呂にはひつたやうだ。燕の子が巢だちをした。ふわ〳〵と庭のうへを飛びあるいて、この部屋のなかへまではひつてくる。裸足で遊んでる子供が、野性を帶びた濁つた聲で、

「つばめ　つばめ　つばめ」

と、一羽づつ別々によぶやうに、あをむいてどなつてゐる。お母さんは、針仕事をしながら、「尻尾の短いのが子供だ



（筆耶一新井石）　田　青

飛白
恰好
こしらへ
お猪口

よ。」といつて教へてゐる。

前の綿畑には、荒い紺飛白の著物をきて手拭を被つた女たちが、這ふやうな恰好をして、草をとつてゐる。

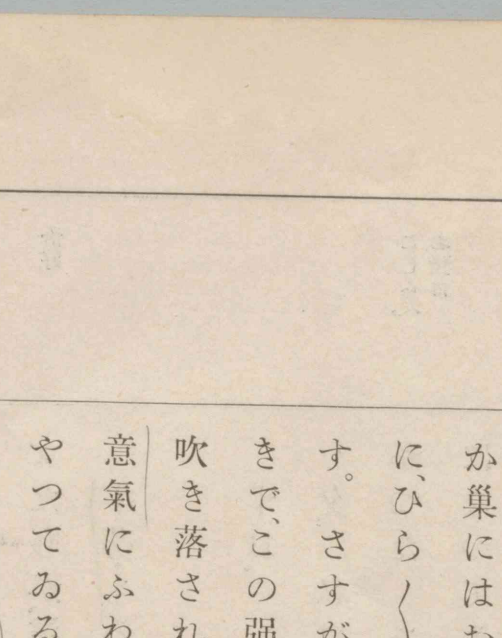
牛蒡・もろこし・さつま芋のはた。

十日。

夕。私は、燕がもういつてしまつたのかと思つて寂しかつた。あのつぶ〳〵の泥でこしらへたお猪口が、からになつてゐたから。

今、私がこの縁に腰をかけてゐたら、燕が歸つて來た。どこにゐたのか、みんな歸つてきた。子燕は人の頭にま

でとまりかける。暮れかゝつたので、親燕がつれて戻つて來たのであらう。まだ遊び足りないとみえて、なかなか巢にはおちつかずに、ひら〳〵と飛びだします。さすがは生れつきで、この强い南風に吹き落されもせず、生意氣にふわりふわりやつてゐる。



めばっ

親燕が、綺麗な尾をひろげてすいと飛んで來て、子燕の口へ羽蟲を入れていつた。少しの間、もさ〳〵してゐた

あひだ

力む　いつかう　丹田

いかう

が、手ぎはよくのみこんだ。

そして大きな口を結んで、力みかへつてゐるが、いつかう丹田に力がはひつてゐない。私は、吹靡いて白く見える無花果や、桐や、葦を眺めながら、氣持よく風にあたつてゐる。

私は庭へ下りて、籠の中のひよつこを見てゐた。七八羽、十羽もゐたであらうか。黄色つぽい母鷄の背なかに乘つて、すべりおちたり、翼のしたをくゞりぬけたりしてゐる。可愛ざかりだ。へんに丸つこくて、びい〳〵いつてゐる。

そのとき子供たちが、「はたけへいかう、はたけへいかう。」

と、いつてせがんだので、唯々諾々とついてゆく。夕日が、丘の向うに落ちかゝつて、鮮かな光を投げてゐる。田も、畑も、森も、水も、みな照らされて、みづ〳〵しく見える。空は晴れわたつた美しい日である。

子供たちは、私を二三町はなれた路ばたの畑へつれていつた。そこには、作さんが編笠をかぶつて、畑を打つてゐた。何を作るのかしら……。

私は暫くそこに立つて見てゐた。歸らうとしたら、子供たちもついてきた。とほせんぼをしたり、ひとの足のうへに裸足でのつたりするので、なか〳〵道がはかどらない。鐵砲玉の淀でべと〳〵になつた手でつかまるのが、やりきれない。

別れ路のところへきて、ふりかへつて見たら、作さんが、籠を背負つてあとから來た。そして、むやみと私にからみつくしんちやんに、「あんまりひつつこくしちやいけないよ。」と、いふやうなことを、遠くから大きな聲で言つた。

私は右へ、みんなは左へ、別れて歸る。作さんは籠をおろして、なかにはひつてる藁か何かをぐつと押しつけて、そのうへに、一番下の子を入れて、背負つてゆく。

—（沼のほとり）—

一六　勘左衞門

夏目漱石

夏目漱石
名は金之助、東京市の人、英文學者、小説家、俳人、大正五年歿、年五十。

首尾よし

夏目漱石

主人の庭は、竹垣を以て四角にしきられてゐる。縁側と平行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎない。垣巡りといふ運動は、この垣の上を落ちないやうに一周するのである。これは遣損ふ事もまゝあるが、首尾よくゆくとお慰みになる。殊に所々に根を焼いた丸太が立つてゐるから、休息するに便宜がある。今日は出來がよかつたので、朝から晝迄に三返遣つて見たが、遣る度にうまくなる。うまくなる度に面白くなる。たうとう四返繰返したが、四返めに半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間ばかりに列を正してとまつた。これは推參な奴だ、人の運動の妨をする、殊にどこの烏だか籍も無い分際で、人の塀へとまるといふ法があるものかと思つたから、「通るんだ。おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見て、にや〳〵笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽めは嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて來たに違ひない。吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。

推參な奴
分際
猶豫

通稱

威光

餘裕

烏は通稱を勘左衞門といふさうだが、なるほど勘左衞門だ。吾が輩がいくら待つても、挨拶もしなければ、飛びもしない。吾が輩は仕方が無いから、そろ〳〵歩き出した。すると、眞先の勘左衞門がちよいと羽を廣げた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。この奴、地面の上ならその分に捨置くのではないが、如何にせん、只さへ骨の折れる道中に、勘左衞門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて、立ちどまつて、三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一さう待つてゐては、足が續かない。先方は羽のある身分であるから、こんな所へはとまりつけ

逗留

障碍物

保證

黒裝束

てゐる。從つて氣に入れば、いつ迄も逗留するだらう。こつちはこれで四返めだ。只さへ疲れてゐる。まして綱渡りにも劣らざる藝當兼運動を遣るのだ。何等の障碍物がなくてすら、落ちないとは保證ができないのに、こんな黒裝束が三箇も前途を遮つては、容易ならざる不都合だ。愈〻となれば、自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそ左樣仕らうか。

猫（夏目漱石筆）

人體
申し子
恥辱
看過
侮辱
烏合の衆

敵は大勢の事ではあるし、殊には餘りこの邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子のやうだ。どうせ質のいゝ奴でないに決つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入りをして、萬一落ちでもしたら、猶更恥辱だと思つてゐると、左向けをした烏が「阿呆。」といつた。最後の奴は御丁寧にも「阿呆、阿呆。」と二聲叫んだ。いかに溫厚なる吾が輩でも、これは看過できない。第一自己の邸内で、烏輩に侮辱されたとあつては、吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうといふなら、體面にかゝはる。決して退却はできない。諺にも「烏合

揺ぎ
癇癪
先鋒

の衆。」といふから三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと、度胸を据ゑてのそ〳〵歩き出す。

烏は知らん顔をして、何か御互に話をしてゐる様子だ。愈〻癇癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目にあはせてやるんだが、殘念な事にはいくら怒つても、のそ〳〵としか歩かれない。漸くの事、先鋒を去る事約五六寸の距離迄來て、もう一息だと思ふと、勘左衞門は申しあはせたやうに、いきなり羽搏きをして、一二尺飛上つた。その風が突然吾が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏外して、すとんと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の所にとまつて、

づぶとい

上から嘴を揃へて、吾が輩の顏を見下してゐる。づぶとい奴だ。睨めつけてやつたが、一向利かない。脊を丸くして、少々唸つたが益〻だめだ。俗人に靈妙な詩の意味がわからぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈出しない。

靈妙

反應
呈出

考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今迄彼等を猫として取扱つてゐた。それが悪い。猫ならこの位やれば確に應へるのだが、あいにく相手は烏だ。烏の勘公とあつてみれば、致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は、到底だめだと見て取つたから、綺麗さつぱりと緣側へ引上げた。

あいにく

綺麗

—（漱石全集）—

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、明治十八年生。

安別
樺太泊居支廳、日露國境を南に距る僅か一粁の小漁村。

荒涼

泥濘

車前草

一七　國境

北原白秋

私は國境安別の砂濱に立つた。上つて見ると、沖から見た通りの荒涼たる寒村であつた。たうとう國境まで來たのかと思ふと、冷々と、私は雨の濕りに顏へたが、また子供のやうに、そこらを駈廻りたくもなつた。

「や、車前草だ。素敵素敵。」

それは、樺太車前草とでもいふのだらう、素晴らしく大きな葉だ。それが踏めば實に柔かな綠を輝かしてゐる。砂濱から一段上ると、その車前草に緣どられた徑が續く。大勢通つたので、ひどい泥濘になつてゐるので、私は草の

上を歩く。

「や、驚いた。馬鈴薯の花だな。」

内地では五六月頃の薄紫の馬鈴薯の花だ。蕊の黄色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁村の家の窓から、女の子がたつた一人、面を出してゐた。その前の畑には、いかにも、雨に濡れた黄色の菜の花が咲き群れてゐた。それに豌豆の花、背の低い唐黍、葱、蔥坊主。その他鮮かな野菜の花。この春色と初夏との色。

私は又びしやびしやと緑の上を歩いて行く。雨が次

第にあがりかけて來たが、まだ横なぐりに吹きつけることがある。

間を隔てて、ぽつりぽつりと駐在所があり、郵便局があつた。それはバラック式のはかないものであつた。以前に國境守護の駐屯兵が住むために急造したといふ小舍のまゝであるらしかつた。東洋風の簡素なものだ。

だが何といふ巨大な虎杖であつたらう。それらの小舍の後、丘の崖から下の裾まで叢生した虎杖の、早くも蟲がついて黄ばみかけた葉の間は、今まさに淡黄色の花盛であつた。それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目覺ましさ！　私はまた立ちとゞまつて、これらの始め

駐在所
バラック
駐屯兵
簡素

なゝかまど

て見る樺太の景趣に目を圓くした。

それはそれは燃え立つやうな細かい赤い實の、つやつやと群つた名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實。」

「なゝかまど。」

と、一人の男の子が私の問に答へた。

風と雨とがまた激しく音を立て始めた。

「おゝい、おゝい。」

前から、後から、我が團員の數々がその風と雨と、しぶきで飛んで行く霧の中から呼び應へる。

かうして私たちは、國境の天測點へと、草ばかりの一つ

の丘を目指して、泥濘のひどい小徑を、うねりうねりして登りかゝつたのである。

日露境界標石

そこらは虎杖の花盛であつた。

樺太虎杖の花は內地で見るやうな、ほの〴〵とした淡紅色を含めてゐないが、その綠がかつた薄黃は、却つて虔しくてあはれであつた。それが雨と霧とに、濡れしづくになつてゐるのである。

太い丸太の無雜作な二坪ばかりの周圍の柵があつた。その柵は朽ちかけて、既に外皮の處々はぼろ〳〵に崩れ

境界標石

かけてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が嚴然と立つてゐるのだ。正方形の臺座に据ゑられた鼠色の標石は、高さは二尺にも滿たないであらう。北面に鷲、南面に菊の御紋が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の叢にもはひつて見た。

北を眺めると、その海岸線は、南と同じやうな、さして高からぬ丘陵が續いて、立枯れのとゞ松の疎林が、しきりなく流れる雨雲の下に、ほう〳〵と打煙つて見えた。寂とした國境であつた。

—（フレップ・トリップ）—

一八　心の洗濯

柴田鳩翁

江戸神田邊に、いたつて貧乏な大根賣がありました。或日、例の通り、一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣り歩いたが、どうしたことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八*つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。「これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巢がはる。どうしたらよからう。」と工夫しながら、いつの間にやら兩*國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根、大根。」と、賣り歩いた。

柴田鳩翁　名は亨、京都の人、心學者、天保十年（一八三九）歿、年五十七。

一荷　目ざし

八つさがり　午後二時過。

兩國橋　東京市隅田川に架かる橋。

知行
標札
月代

或御屋敷の表長屋の窓の内から、「これ大根屋。」と呼ぶ。「やれうれしや、まづ知行にありついた。」と、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀のうち、門口には何某と標札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、緣先の障子をあけ、旦那殿がいま月代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結ひながら、「その大根はいくらぢや。」といふ。「百に三把でござります。」といへば、「それはたかい。二十四文づつにして置け。」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損の

懸値
かぶり
しやうもやうもなく

たつことなれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下されい。今朝から江戸中を泣きあるいて、まだ一把も賣れません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸値は一切申しません。」といふ。かの侍、かぶりふり、「それでもたかい。まからずばまづよしにせう。」と言ひ捨てて、緣先の障子をはたと締められた。

大根屋もいろ〳〵というて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、「はて、つまらぬ。もう日の入りには間もなし。なんでも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人が明日の命が繋がれぬ。なんとしたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら、緣先の金盥

にふつと目がついた。障子は締めてある、あたりに見る人はなし。かの金盥を水の入つたまゝで、大根二三把の下へそつと隱す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狹うなつて、五尺の身體をしばらくも置くべき處がない。

狹うなつて

そこで、荷を擔いで門口を出ようとすると、障子の內から「これ大根屋。」と呼びかけられる。ぬからぬ顏で「まかりません。」といふと、「いやゝ〳〵、値はねぎるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりと明けられた。

ぬからぬ顏

去なう

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ「何把ほど入りまする。はした賣りはできません。」と

はした賣り

いふ。「いやゝ〳〵、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この緣先へ並べてくれい。」といはれる。さあ大根屋も一所懸命、障子の締つてあるうちなら、金盥の出しやうもあらうに、今更金盥が出されもせず。というて、賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろうろとしてゐると、かのお侍が、大根屋の顏をきつと見て「われはきつうろたへてゐるぞよ。まづ金盥から出して、大根の數を數へて見よ。」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わなゝ〳〵顏へながら、かの金だらひを、恥づかしさうにそつと出して土

われ

きつう

總身

恥づ

に手をつき、「旦那様、眞平御免なされて下されませ。何を隠しませう。先刻も申しまする通り、けさからまだ一文の商ひもいたしませず、このまゝ歸りますると、明日親子五人が食べますことがなりません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。」と色青ざめて、土にあたまをすりつけて、詫言をする。

貧のぬすみ

氣だて
氣色

よむ

かのお侍、思ひの外、氣だてのよい人で、更に立腹の氣色も見えず、「いや〳〵その詫言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よ。」といはれる。こは〳〵ながら、大根を緣へ積み上げたところが二十三把。かのお侍、大根賣を呼ん

で、「さあ、その方がいふ通り、二十三把七百六十四文、ついでに金盥を添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性はよほど汚れてあると見える。この金盥は顏や手足を洗ふ道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言ひ捨てて、障子を締めて内へはひる。かの大根屋も、これから本心になつて夜晝働き、三年目には、遂に相應な八百屋になつたといふことでござります。

—（鳩翁道話）—

とつくり

鳩翁道話　三卷、鳩翁の道話書。

元田永孚
熊本縣の人、漢學者、明治天皇の侍講、樞密顧問官、男爵、明治二十三年歿、年七十四。
事埋　機宜　捷給
砥礪　研磨　敏達洞徹
質　端午

一九　敏智

元田永孚

智の人における、其の用まことに大なり。然れども貴ぶ所は、事理に敏にして機宜に中るに在り。若し徒らに捷給に驚せ、利巧に趨るときは、其の害亦甚だし。故に忠信を以て本と爲し、道理を以て砥礪と爲し、研磨してやまざれば則ち觸るゝ所敏達洞徹、天下の事に於て亨らざること無し。

徳川家康幼にして駿河の今川氏に質たり。駿河の俗、端午を以て石戰の戯を作す。觀る者黨を分ちて勢を助く。家康甫めて十歳、奴肩に騎して之を觀る。一隊は三百餘人、其の一は之に半ばす。人爭うて衆きに赴く。家康奴に命じて寡きに就かしむ。奴異しみて之を問ふ。家康曰く、「衆き者は勢を恃みて其の心一ならず。寡き者は懼れて力を專らにす。其の勝必せり。」と。果して其の言の如し。今川義元之を聞いて曰く、「將門將を出す、信なるかな。」と。

宋の司馬光、七歳の時、群兒庭に戯れ、一兒甕に登り、足跌して水中に沒す。衆皆驚走す。光、石を持ち、甕を擊ちて之を破る。兒乃ち活きることを得たり。

—（幼學綱要）—

宋　趙匡胤の建てし支那の代號、十八代三百二十年にして元に滅さる。（西暦九六〇—一二七九）
司馬光　宋時代の名相、史家、思想家。（西暦一〇一九—一〇八六）
幼學綱要　一卷、元田永孚の撰、明治天皇の勅を奉じて、教學の要を說ける書にして、明治初年小學校修身教科書として廣く行はれたり。

二〇　三百年の老柏

和田垣謙三

十餘年前薨去せられし人にして、清廉高潔を以て知られたる某伯あり。嘗て明治初年に購ひたる品*川御殿山に邸を構へ、庭園には數千本の櫻樹を移植せしが、櫻のみにては自然の風致乏しきを以て、松柏の老樹を植込まんとて、諸所にこれを覓めゐたり。

或時、目*黒附近を散策せしに、とある一農家に見事なる一老柏の雄姿堂々として、その男性美を發揮して屹立せるあり。伯爵これを見て、垂涎三尺、是非この老木を我が邸内に移さばやと思ひ、つか〳〵と茅屋に進み入り、相當

和田垣謙三　兵庫縣の人、法學博士、大正八年歿、年六十。
清廉高潔
品川御殿山　東京市品川區にあり。
風致
覓む—求む
目黒　東京市目黒區。
散策
屹立
垂涎三尺
移さばや

の代金を提供して所望に及びしに、老人夫婦は中々これに應ずべき氣色なく、「御覽の通り、實にお恥づかしき有樣に陷れる折柄、かゝる莫大の金を以て買取らんとの思召しは誠に有難けれども、これだけは御免を蒙りたし。今こそかく零落はしたれ、祖先の時代には永く土地の庄屋を勤めたることもあり。彼の柏の木こそ、その昔三代將軍家光公がこの界隈に鷹狩せられし時、我が家にて御休憩あり、その時記念の爲にとて御手植に成りしものにて、實に我が家の寶なり。他の木は或は枯れ、或は賣り、或は擢いて薪にもなしたれど、彼の木のみは右の如き由緒あれば、先祖の形見、三代將軍御手植の靈木として、我々夫婦

所望に及ぶ
氣色
零落
界隈
由緒
靈木

のものが大切に守りみるなり。」と言ひき。

心根

伯爵は老人夫婦が氣高き心根に熱き涙をそゝぎ、強ひてこれを請ひ得ざりしに、隨行の一人、その某伯爵とて思ひやり深き人なること、さてはかぎりある人壽を以て三百年の老木を守らんよりは、寧ろ伯爵家に讓らば、伯爵百歳の後と雖も、その子々孫々と共にこの木は永く茂り榮え行くべしとて、利害を諭せしに、老人涙ながらに膝をすすめ、「世に情深き伯爵殿とは知らず、すげなくお斷り申しおろかさよ。この上は却つて私よりその保存方をお願ひ申したし。代金などは如何樣にてもよろし。」と言放ちたるに、伯爵も厚意を謝し、歡んで保存の依頼を引受く

人壽

百歳の後

すげなし

べしとて、卽座に黃金數十枚を老人に與へ、「移植の根廻し成るまでは、從前の通りこれを大切に保管しくれよ。」とて歸りたり。

從前

保管

二年の後、今は移植に差支なしとて伯爵は許多の人夫を遣せしに、老人は粗末ながらも羽織袴を著け、老婆は古びたれども紋附の禮服を著し、恭しく見送つて伯爵邸に到り、その首尾よく立派なる庭に植ゑつけられたるを見て、大いに歡び、且つ「これにて私どもも安心なり、何時死すとも心のこりなし。只こゝに一のお願あり、私どもが存命中は、年に一度御屋敷に罷りでて、今日まで朝夕眺めゐたるこの木の姿を見たし。」と申し出でたるに、伯爵は快諾

許多

存命中

快諾

引出物　を與へしのみか、更に引出物を與へたり。

星霜　爾來幾星霜、年に一回は必ず彼の老夫婦相携へて、この老柏を見舞ひ、伯爵家にても厚くこれをもてなししに、その後老翁は遂に老衰してこの世を去り、老婆のみ一人見舞ひに來たりしも、亦程なくみまかりぬ。されば伯爵も故人に代りて、更にこの老木の手入をよくし、その保存に力を盡されたるが、その後數年ならずして伯爵も亦黄泉の客となり、非情の老木獨り老いて益〻壯なりき。

みまかる

黄泉の客

非情　然るにその後、邸内の模樣變更の時、その木を更に移植せしに、その爲にやありけん、又自然の命數盡きたるにやありけん、歴史ある老柏も亦老人夫婦竝びに伯爵の後を

非情

老い。

自然の命數

乞立　慕ふが如く、あはれにも枯果てけり。今も猶その枯れたる姿のまゝにて庭の中央に乞立し、その太き幹には姫蔦絡み纏れり。

姫蔦

以上は予が嘗て故伯爵邸に到りし時、その枯木を打眺めつゝ、伯爵未亡人が潸然として物語られし所にして、當時予も一種悲哀の念を催し、覺えず貰ひ泣きしたるが、今これをありのまゝに記し、未亡人の承諾を經てこゝに載す。伯爵とは別人ならず、卽ちかの「鉢の木」の主人公たる佐野源左衞門常世の末孫、故佐野常民伯その人なり。

潸然

鉢の木　謡曲の名。

佐野常民　佐賀縣の人、伯爵樞密顧問官、日本赤十字社長、明治三十五年歿、年五十一。

—（兎糞錄）—

二一　涼み臺

吉村冬彥

吉村冬彥
本名は寺田寅彥、高知縣の人、理學博士、東京帝國大學教授、昭和十年歿、年五十八。

單調　出さう　紛れる

吉村冬彥

毎年夏になつて、そろ〳〵夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりをつける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言出される。しかしその翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れ

徽

たりして、つい一日二日と延びる。その內にいよ〳〵今日はといふ事になつて、朝の內に物置の屋根裏から臺が取下され、一年中の塵埃や徽が、ぬれ雜巾で丁寧に拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよいよ夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、折疊み椅子が三つ同時に竝べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の內には、繩飛をする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいてゐるものもある。明朝咲く朝顏の莟を數へて報告するものもある。幼い女兒二人は、緣側へいろ〳〵な花を竝べ

幻像

て、花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話をさせたりしてゐる。幼い子等には、まだ見た事のない父母の郷里が、お伽噺の中の國のやうに、①不思議な幻像に滿たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、②何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話をねだつては、おしまひに、「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人がいふと、もう一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖

朧げ。覺え。

淨化純化

父の若かつた頃の昔話も屢出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠い遠い昔の出來事であつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は朧げにしか覺えてゐない子供等には、會津戰爭や西南戰爭時代の昔話は、書物で見る古い歷史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに③却つて祖父に對するなつかしみは、淨化され純化されて、子供等の頭の中の神殿に收められるだらうと思はれる。

今年の夏、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の內

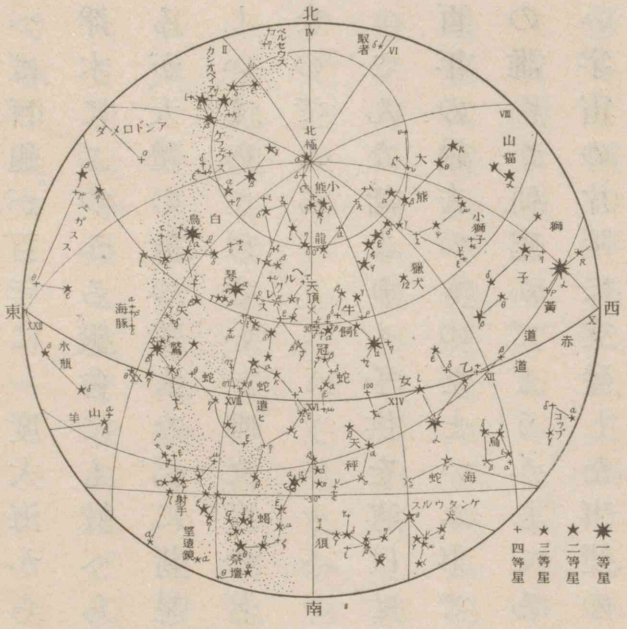
星座圖
遊星
軌道
動機
星宿

に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。星座圖を出して來て、鉛筆で現在の位置をしるし、その脇へ日附を書いて置いて、この夏中のこの遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふ事にした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。その頃は、まだ織女や牽牛は、宵の內はかなり東にあつた。西の方の獅子座には、白く大きな木星が、屋根越しに氷のやうな光を投げてゐた。空を眺めてゐる內に、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が、夜中空を見張つ

素人
莫大

てゐる話をして、それから新星の發見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を暗記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。

一秒時間に三十萬キロメートルを走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、莫大な距離をへだてて散布された



七月の星座圖

發現　天體の二つが、偶然接近して新星の發現となる機會は、譬
譬へ。　へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた
浮木にぶつかる機會にも較べられるほど少なさうであ
るが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現はそれほど珍ら
しいものではない。唯光度の著しく強いのが、割合に稀
なのである。

こんな話よりも、子供を喜ばせたのは、新星の光が數十
百年の過去のものだといふ事であつた。我が家の先祖
の誰かが、何處かで、どうかしてゐたと同じ時刻に、遠い遠
い宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に、
この世界に屆くといふ事であつた。

突發

白鳥星座

天頂

二等星

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく續いて、涼み
臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。
或朝新聞を見てゐると、某理學士が流星の觀測中、白鳥
星座に新星を發見したといふ記事が出てゐた。その日
の夕方に涼み臺へ出て、子供と共にその新星を搜したら
すぐ分つた。しばらく見なかつた間に季節が進んでゐ
る事は、織女・牽牛が宵の內に眞上に來てゐるのでも知ら
れた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥星座の一番
大きな二等星と光を爭ふほどに、輝きまたゝいてゐるの
であつた。

「しばらく怠けたので、新星を發見し損なつたね。」

といつたら、子供はどう思つたか、顏を眞赤にして、面白さうに笑つてゐた。

その內にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。隨つて星の事も、もう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事はこれから始るので、學者達は、毎晩曇つた空を眺めて、晴間を待ちあかしてゐる事であらう。

—(冬彦集)—

阿部次郎
山形縣の人、哲學者、東北帝國大學敎授、明治十六年生。

月見草

仄か

輕井澤
長野縣北佐久郡。

二二　月見草

阿部次郎

*月見草は私の好きな花の一つである。取放していへば、黃色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの淸彩な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草の仄かな黃色を、いひ難く懷かしいものに思はせるのである。

自分は一昨々年の夏、*輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗いうちに、狹苦しく滿員になつてゐる停車場前の旅亭を出で、新舊兩市街の間の野原を步いた。月見草が曉に近くいくらか萎れかゝつ

て、限りもなく咲きつゞいてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分は何ともいへぬ親しい氣持になつて、又旅舍に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたりに見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急に脹んで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が、蓮の花の開く音を聞いて悟を開いたといふ話を、かすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしやがんで見てゐると、いかにも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる蕚が後退を

脹む
後退

はじめる。蕚が開くと、卷いてゐた花瓣が次第に脹んで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると、四つの花瓣が一緒にふうはりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、仄かな香氣が鮮かに鼻をうつ時の氣持は、なんともいはれない。明日の朝になれば、凋んでしまふはかない花であるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても、固より悟は開けない。併し悟が開けなくても、新しく咲く花を見守る靜かな愛の心は、本當に有難いものであつた。

—(北郊雜記)—

大町桂月
名は芳衞、高知縣の人、國文學者、大正十四年歿、年五十七。
伊澤先生
名は修二、教育家、貴族院議員、吃音矯正に力む、大正六年歿、年六十七。
吃音

二三　酒勾なる二兒へ

大町桂月

毎々手紙をくれて嬉しい。伊*澤先生が二十日まで居るがよからうとの御手紙故、そのつもりにて大いに勉強すべし。十五六日頃一寸行くかも知れぬが、二十日には必ず迎へに行く。

大町桂月

土産物はその時ゆつくり買ひてよかるべし。先生よりの御手紙に、「決して父の吃音を眞似してはならぬ。」といふ事をお前達に誓はせるとの事故、お前達もその

つもりにて、先生の言はるゝ事を承るべし。この父の吃音の眞似させたくなきは言ふまでもなし。その外缺點もあり、惡癖もあり。世上どんな人でも長所と短所とあるものなり。人は他人の短所には氣がつき易けれど、他人の長所には氣がつきにくきものなり。この父は短所多けれど、男らしいといふ氣象は大いに持つて居るなり。これはお前達が年長ずるにつれて分つてくる。文章も決して人後に落ちぬなり。この二點は大いに眞似して可なり。

「餓ゑては食をえらばず。」と、古の人が言へり。お前達は肴が嫌ひなるが、餓ゑたら必ず食へる。嫌ひで

惡癖
氣象
人後
餓ゑ。

も食つてをれば、終には好きになる。何か罐詰でも送ることはわけも無いが、それでは却つてお前達のためにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行したり、人の家に行つたりそれの他いろ〳〵の時に困る。人は食物に好き嫌ひがあるが如く、萬事氣隨氣儘になり易し。氣隨氣儘では世は渡れぬ。何事も辛抱が大切なり。この儀よく〳〵心に銘すべし。今日は父も母も忙がしくて郵便局へ行けぬ故、爲替は明日あたり送る。

―（桂月全集）―

氣隨氣儘

佐々木指月名は榮多、神奈川縣の人、彫刻家、創作家、明治十五年生。

登錄

星條旗の虹

二四　祖國

佐々木指月

一千九百十八年九月、世界大戰爭の眞最中、私は北米合衆國の人口登錄を紐育（ニューヨーク）で受けた。

當時米國は第二國民軍の動員を終つて、第三國民軍の召集をしようといふ前であつたから、街路は星條旗の虹を靡かせて行進する軍隊の喇叭の音が、高い建物に反響し、市民はもう熱狂してしまつてゐた。青年といへば悉く軍隊の制服を纏ひ、纏はないものは、老人と婦人と子供と外國人だけといふほどであつた。

登錄所で私の名が合衆國の帳簿の上に登錄されて、や

がて送附さるべき地方兵事課の召集狀を待つ身になつて、私は星條旗に對して熱心に敬意を表するものとなつた。一週間ばかり經つと、地方兵事課から呼出狀が來た。

ホール

繪筺

繪筺（ボスター）は壁に貼られて、その上から電球が幾つか灯の葩（はなびら）を開いてゐた。呼出された人々は、はや詰めかけてゐた。黒人もゐれば、猶太（ユダヤ）人もゐた。妻を同伴した英語を解せ

自由の女神

出頭したのは丁度夕方であつた。

館内の廣いホールには星條旗が掲げられ、自由の女神コロンビアの

宣誓

ぬ人もゐた。

私たちは女事務員から下調を受けて、公式の宣誓場に呼入れられるのを待つてゐた。獨身の市民は一も二もなく軍籍に入れられた。妻子があつても、財産のある人や、また收入のある妻を持つた人は、同じく軍籍に入れられた。

まだ市民になつてゐなかつた外國人でも、進んで召集に應ずる宣誓をなし、して敬意を表した。群集はこれに對して敬意を表した。

私の順番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

市民權

「先づあなたは虚言を言はないといふことを、右の手を擧げてお誓ひなさい。」

私は右の手を擧げた。

「あなたは合衆國の市民ですか。」

「否。」

「あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。」

私の心の中には或疑問が閃いた。幾人の日本人がこの問に對して「然り。」と答へ得るであらうか。日本人には合衆國の市民權を與へないことになつてゐる。一併しその市民權を得ようとする希望を持つてゐるか、と問はれた時に、その希望をだに心に持つてゐないと答へれば、そ

同化

不知不識

れはつまりこの國に同化することを拒むものであらねばならぬ。太平洋沿岸でもこの同じ問を發してゐるであらう。それに就いて、我が同胞は何と答へてゐるであらうか。私は暫く默然として、コロンビアの畫像を眺めてゐた。

この國の市民になるには、その人の本國とこの國と一旦戰端を開く曉には、その本國に對して銃を執るといふことを誓はねばならぬ。私にそれが誓へようか。いや、私はこの國の市民となることを、本心から望んでゐただらうか。女神コロンビアの畫像は、不知不識に抱いてゐた二重愛國心を憐れむやうに見えた。

委員は緘默を守つて、私の答を待つてゐた。

「否。」

と、私は答へた。すると更に問うた。

「あなたは合衆國の軍隊に加はつて、合衆國の敵と戰ふ意志を持つてゐませんか。」

私には答をするのが苦しかつた。私はこの國に十三年來住んでゐて、その間この國に養はれて來た。然るに、今この國が多くの犧牲を拂つて戰爭をしてゐる秋に當つて、この國の爲に戰ふといふ誓を拒まなければならないのを悲しんだ。若し一度意を決して、合衆國の軍隊に加はつて大西洋を渡るならば、私は自分が生れた國土を

愛するといふ、狹いけれども深い愛國心を捨てなければならぬ。併し私は、自分の肉體はまだ故國の土に屬し、自分の靈魂はなほ祖先のそれに屬するものであることに思ひ到つた。

私は、

「否。」

と答へた。

「それでは、あなたはあなたの本國に歸つて、あなたの本國の敵と戰ひますか。」

何といふ用心深い質問であらう。何といふ意味の廣汎な質問であらう。今私たちの敵と看做してゐるもの

は、獨逸及びその聯合國であるが、若し他日、日本がこの國と砲火の間に見ゆる日が來たとしたら、私たちは本國に歸つて、この國と戰ふかといふ質問になつて來る。この國の市民になる希望もない、この國の軍隊に加はるのも望まない、併しこの國との戰には勇んで出るといふ誓を、今私は立てねばならぬ。私はこの時、私たちはこの國から排斥されても仕方がないと思つた。そして、

「然り。」

と答へた。

かうして、私は宣誓場を離れ、下を向いて人々の中を通つて歩廊に出た。

—（中央公論）—

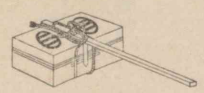
二五　堪忍

柳澤淇園

予が友としける平澤何某といふ士は、堪忍強き人にして、ある時、主用ありて人多く具して行きける道のほどにて、二階より齒磨をつかひて吐きたる唾の、過ちて平澤が著せし上下へしたゝかかゝりたれば、供人大いに憤り、その家に入り、唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤止めて、暫しこの家を借るべしとて、その家に入りて、挾箱より著換の上下を取出して著かへけるに、その家の者共大勢出でて詫ぶるにぞ、平澤申しけるは、「過なるべし。重ねて心をつくべし。」とて出で行きぬ。供人言ひけるは、「い

柳澤淇園
名は里恭、大和國（奈良縣）郡山藩士、博識多才、殊に畫をよくす、寶曆八年（一七五八）歿、年五十三。

上下　したゝか



挾箱

かでその儘にゆるし置き給へるぞ。」と言へば、「けふは大切なる主用なり。かゝる些細の事に隙取るべき事にあらず。わが常に守れる堪忍はこの事なり。」と言へり。

その後また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏の頃、溝のけがれ水を打ちけるが、平澤が袴の裾より下をけがせり。また〳〵供人大いに憤り、已に打擲にも及ばんとせしを、おし止めて行きければ、供人申しけるは、「いふかひなき事にて候。」と言ふに、「さにはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵る事、士たる者の本意に違へり。たゞ堪忍だにせば、世に恥辱と言ふ事あるべからず。」と言はれしとぞ。

―（雲萍雜志）―

些細　打擲　いふかひなし　私　恥辱

雲萍雜志　四巻、柳澤洪園の隨筆。

二六　母と蘆

西條八十

西條八十　東京市の人、詩人、明治二十五年生。

ふるさとの母をおもへば、
片丘の蘆もなつかし。

さや〳〵と風のわたれば、
靡きよる夕の穂波、
わが母の眉をしのばせ。

しめやかに雨ふる夜半は、

穂波

葉ずれ　そことなき葉ずれのひゞき、
まがふ　わが母の聲音にまがふ。

ふるさとの母をおもへば、
かの青き蘆もなつかし。

少年時代私は東京を離れて、一年ばかり奈良の古都に近い田舍で暮したことがある。生れて初めて兩親の傍を離れたので、私は明けても暮れても東京の空を眺めては、明るい銀座の街の灯を戀しがつた。

灯—燈

私がゐた家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い

蘆が一面に生茂つてゐた。私の室の窓の障子を開けると、すぐ眼の前にそれが見えた。晝間は丘のうへにコバルト色の空が覗いてゐる。をり〳〵白い雲が流れた。

をり〳〵

蘆

蘆のなかでは葦切が玉を切るやうな音を立てた。

夕暮には、何處からともなく次第に黝く煙のやうにせまる暮色のうちを、冷たい夕風がさや〳〵と渡つてきては、蘆の青細い葉をゆるがした。私が一番好きなのは、この夕風にそよぐ蘆の葉を見てゐることであつた。

黝く

生え。
うすら

あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光りかげる蘆の穂波を見てゐると、それがいろ〳〵に人の眉・鼻・口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔附に見えたので、私は懐かしいふるさとの母の顔を思ひだした。私はじつと眼をつぶつて、その蘆の生えた丘の面いつぱいの巨きな白い母の顔を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風のなかで、ひとり「お母さん」と、懐かしく、涙ぐましく叫ぶのであつた。

またその時分、私は毎晩一里の路を歩いて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。若草山の麓に、ギンポールといふアメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近

をそはる。
田圃
内證

い年で、年中眞黒い服を著て、赤くたゞれた兎のやうな眼に、大きな眼鏡をかけてゐた。その人に、夕方の六時から七時まで、英語の讀方と發音をそはり、それからあたゝかいおいしい紅茶を御馳走されて歸つてくる時分には、もう田圃のなかの夜路は、とつぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂しく聞えるのであつた。

かうして獨り丘の徑を下つて來る時に、兩側の蘆の葉のさら〳〵とそよぐ音は、恰も彼等が内證でなにか囁きあつてゐるやうであつた。時には、多數の人がその葉蔭に集つて、何かひそ〳〵話してゐるのではないかと、思はれることがあつた。さうしてその聲のなかに、殊更聞き

おぼえのあるなつかしい母の聲が聽きとれたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、とりわけさうした感じが深かつた。室へ戻つて、戸を締めて、床に就いてからも、優しく諄々と諭すやうな母の聲が、いつまでも、いつまでも、しみ〴〵と耳もとに響いてゐるのであつた。

その頃の母戀しさの心を、私は「母と蘆」といふ名でこゝに歌つたのである。

—(新しい詩の味はひ方)—

諄々

二七　上杉謙信

一　爭ふ所は弓箭に在り

武田信玄、國、海に濱せず。鹽を東海に仰ぐ。*今川氏眞、北條氏康と謀り、陰かに其の鹽を閉づ。甲斐大いに困しむ。上杉謙信之を聞き、書を信玄に寄せて曰く、「聞く、氏康・氏眞、君を困しむるに鹽を以てすと。不勇不義なり。我、公と爭へども、爭ふ所は弓箭に在りて、米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我が國に取れ。多寡は唯〻命のまゝなり。」と。乃ち賈人に命じ、價を平かにして之を給せしむ。

二　箸を捨てて歎ず

今川氏眞　義元の子。駿河・三河・遠江を領す。慶長十九年(一六一四)歿、年七十七。

北條氏康　早雲の孫、氏綱の子、伊豆・相模・武藏・上總を領す、元龜二年(一五七一)歿、年五十七。

弓箭　以往

唯〻命のまゝなり　賈人給す

北條氏政　氏康の子、天正十年(三四二)豐臣秀吉に攻められて自殺す、年五十三。
好敵手
流涕
長篠　愛知縣(三河國)に在り、德川氏の將奥平信昌之を守る、天正三年(三三五)武田勝頼之を攻め、却つて德川・織田聯合軍の爲に大敗す。
弱子
何を以てか…

信玄卒す。北*條氏政、使を馳せて之を謙信に告ぐ。謙信方に食す。箸を捨てて歎じて曰く、「吾が好敵手を失へり。世復た此の英雄男子有らんや。」と。因りて潸然として流涕すること之を久しうす。

三　何を以てか天下に對せん

武田氏の*長篠に敗るゝや、越後の將士、謙信に說いて曰く、「甲斐の兵新に敗る。乘ず可きなり。」と。謙信曰く、「我、信玄と數十戰して取ること能はざりき。其の死するに及んで、弱子を侮り、敗に乘じて之を取らば、何を以てか天下に對せん。」と。

(「日本外史」に據る)

澁川玄耳　名は柳次郎、別號藪野椋十、佐賀縣の人、東京朝日新聞記者、大正十五年歿、年五十五。

二八　國引

澁川玄耳

伊弉諾神・伊弉冉神がお生みになつた日本は、初のほどは小さくて足りない處が多かつたのを、子孫の神々が漸次に修理を加へ給うて、今のやうな立派な國となつたのである。

出雲の國はとりわけ小さかつた。ごく幅が狹くて帶のやうであつた。素*戔嗚命の四世の孫の臣角(おみつぬ)命といふ方が、いかにもこれでは狹過ぎる、ちと縫ひ足さなければいけないと、思召し立たれた。

そこで、海岸の巖の上に立つて、何處か「國の餘り」は無い

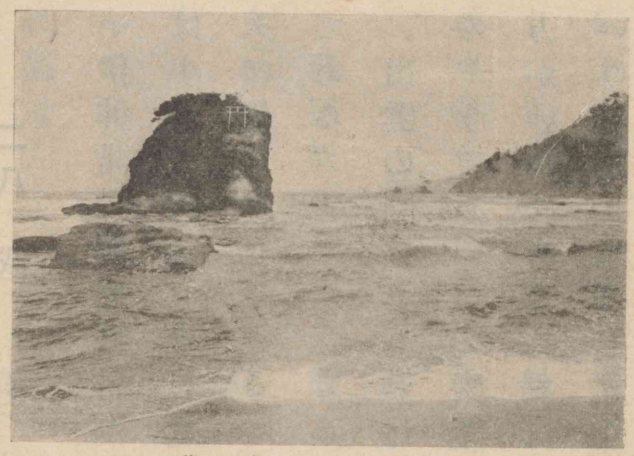
漫々

神通力

かと、遙かに西の方を御覽になると、漫々たる大海を隔てて、彼方に新羅の國が見える。

「おゝ有る有る。新羅の岬に國の餘りがある。あれを引寄せて、この國に縫ひあはせよう。」

と、臣角命は神通力を現して、その新羅の國の出鼻をぱくりと鋤きとつて、ざくりと衝きはなして、ずばりと切分けて、さて三(みつ)撚(より)の大綱を打掛けて、その片はしに結びつけ、えいやえいやと手繰り寄せ、そろりそろりと引寄せて「國來い、國來い、此處まで來い。」と、たうとう引きつけて縫ひあはされたのが、古津(こつ)から杵築(きづき)の岬のあたりである。この時國引きの綱を繋(つなぎ)止めた材が、卽ち今の三瓶(さんべ)山といふ山、又その綱は薗(その)の長濱になつてゐるのである。



杵築の海岸

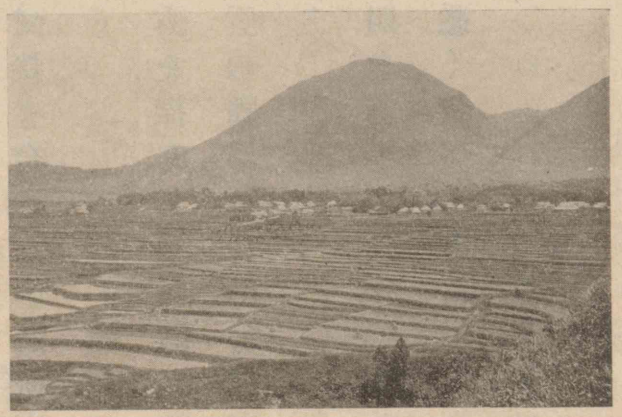
まだこれでも出雲の國が小さいと、この度は北の方に國の餘りは無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見え

古津　島根縣簸川郡小津の古名。

杵築　島根縣簸川郡にあり。

三瓶山　島根縣安濃郡にあり。

薗の長濱　杵築の南方一帶の砂濱。



三瓶山

た。早速其處を切分けて、又もや三撚の綱打掛けて、「國來い、國來い、此處まで來い。」と引寄せて、接ぎ合せたのが、秋鹿郡あたりになつた。

秋鹿郡　明治二十九年廢せらる、現に島根縣八束郡の一部。

今少し足さうといつて、東北の方を探して、その國の餘りを引寄せて、たうとう今日の出雲の國がすつかり出來上つたのである。

神代より幾千萬年を經て明治四十三年になつて、彼のちぎり殘りの朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引かれて了ふことになつた。

（古事記噺）

二九　旅順の戰跡

杉村楚人冠

杉村楚人冠　名は廣太郎、和歌山縣の人、東京朝日新聞社員、明治五年生。先導

廣永砲兵中尉の先導にて、先づ二百三高地より順次に我が攻圍軍の破壞したる砲壘を訪へり。嗚呼、二百三高地・松樹山・二龍山・東鷄冠山、いづれはあれど、ひとしなみに壞れたる樣の淺ましくもあるかな。頂上は大小の石塊磊々として、さながら荒野の如し。彈片散亂し、土囊狼藉し、鐵軌の歪みくねりて一端天に朝せるあり。不發の重砲彈の頭深く地に食入りたるあり。枯骨の既に雨露に暴されて、白化せるあり。背囊・水筒の半ば朽ちて地に委せるあり。かゝる中に竦然として我知らず戰慄したる

石塊磊々

狼藉

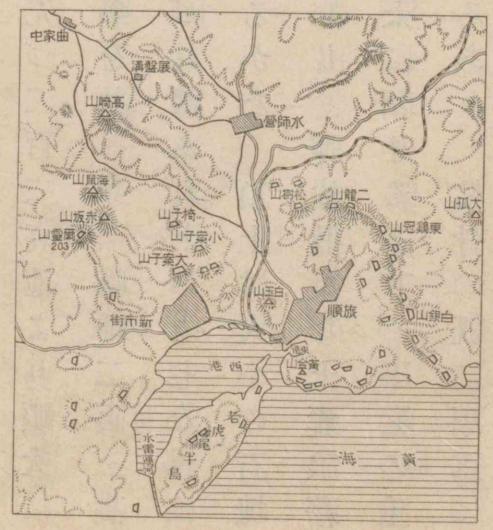
枯骨

竦然

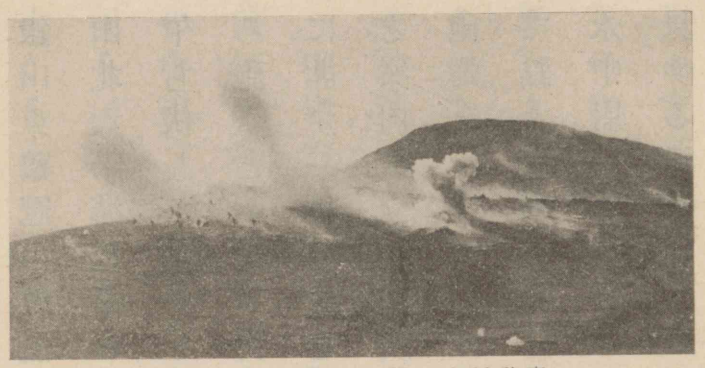
襤褸
髑髏
眼窩

コンドラテンコ　ロシヤの戰術家。（西暦一八五七―一九〇四）

は、松樹山にて、とある襤褸布片の束ねたるを解き見しに、中には尚生々しき血塊を包み居たる。濟然として暗涙を催さしめたるは、東鷄冠山にて、齒を食ひしばりたる髑髏の、まじ〳〵と人を睨みつけたらんやうに、眼窩空しく窪みたるを見たる。悲慘を極めたるは、東鷄冠山北砲臺の入口の右側に、二十八珊の巨彈天井を貫きて落下し、其の下に在りしコンドラテンコ將軍の之が爲に仆れしといふ跡。壯烈と覺えしは、同



窮窖
下瞰
指顧の間



東鷄冠山に於ける我が軍の攻撃

の間に海鼠の如く横じ砲臺にて、我が兵が初めて敵の窮窖内に打入り、暗中に相闘へりといふ跡、及び我が兵が二龍山砲臺占領後、同砲臺の窮窖内に隱れて出でざる露兵を追立てんとて、煙にてくすべ立てたりといふ跡。

今二百三高地の巓に立ちて下瞰すれば、げにも旅順港新舊市街は歷歷指顧の間に在り。北面すれば、赤坂山高く我を壓して至り、海鼠山其

赭土　赭は音者。

痘痕　痘は音豆。

水遠く渤海に接するを見るべし。東面すれば、遠くは白銀山・東鷄冠山・盤龍山・二龍山・松樹山・近くして椅子山・案子山・北太陽溝砲臺の相列びて立てる、恰も尺蠖（しやくとりむし）の乍ち起ち乍ち伏して寄せくるに似たり。北太陽溝砲臺は、一にぼろ砲臺といふ。其の古くして用ゐるべからざるをいふに非ず、一見襤褸を纏へるが如く見ゆるに由りて名づくと、案内に立てる廣永中尉の語る。此の邊の山々、山腹に砲彈を受けざるはなし。其の幾百の彈孔皆赭土を露して、點々綠草の間に存するもの、宛として痘痕の如し。廣永中尉鞭を上げて、遙かに一地點を指さして曰く、「彼方に見ゆる建物は、これ當年電氣鐵條網の發電所たりしところ

掩壕

頑強

ろ。電氣鐵條網とは強烈なる電流を鐵條網に傳へたるものにして、人の之に近づくや、其の未だ身を接せざるに、忽ち之に吸引せられて燒死す。其の慘害實に怖るべきものありき。而も今、其の發電所は旅順市街百千の電燈の發電所として、我が軍に利用せらる。亦快ならずや。」と。

中尉、行く行く旅順開城當日の光景を語りて曰く、「余等前年來掩壕の中に在り。開城當日は元日のこととて、穴の中にて雜煮を喫し、酒など酌交して、形ばかりの正月を祝し居たり。然るに、誰いふとなく、敵が開城せりとの報、夫から夫へと傳はれり。余等固より之を信ぜず。現に昨夜まで、然く頑強に抵抗したるものが、今日急に開城せ

一笑に附す

半信半疑

砲壘

無限の感慨

んなどとは思ひもよらずと、殆ど之を一笑に附したり。

然れども、同じき報は異なれる人より續々傳はり、外面を走せちがふ人馬の聲、亦何とやらん徒事ならず聞えたり。余等乃ち半信半疑の裡に掩壕を出でて、前方を見やれば、砲壘といふ砲壘、一として日章旗ならぬはなし。余等の一たび掩壕に入るや、初より生を期せず。然るに今正月元日、滿山盡く旭旗の飜るを見ては、いひ知れぬ感に打たれて、覺えず涙を催せり。」と。中尉は斯く語りて、無限の感慨禁ずべからざるものあるが如し。余も亦頭を上ぐること能はざるもの少時。

我等が二百三高地を下らんとするに、我等をかけ抜けて、大急ぎに下り行かんとする人あるに會す。「何とてさは急ぎ給ふぞ。」と問へば、「先の程より放尿せんと欲すれども、如何にしても同胞忠死の跡を汚すに忍びず、さてこそ斯くは急ぎ行くなれ。」と答へて又急ぎ下る。宇治大納言の物語にでも見ゆべき話と面白し。又松樹山にてのことなりき。愈砲臺を辭し去らんとせる時、ふと見上げたる彼方の小高き所に「弔忠魂」と記して、さゝやかなる卒塔婆一基立ちたり。我等と共に立居りし二十餘名は、誰言ひ合すともなく、盡く脱帽して首を垂れたり。あはれ、其の荒みに荒める砲壘の廢墟に、荒くれたる男の杖を留めて、一基の卒塔婆に禮を施したる様よ。

—（へちまのかは）—

宇治大納言物語　今昔物語ともいふ、三十一卷、平安時代に成りし物語集、作者は源隆國と傳へらる。

卒塔婆

廢墟

清原貞雄　大分縣の人、國史學者、文學博士、廣島文理科大學教授、明治十八年生。

稔る　緯度　燦爛

三〇　惠まれた國土

清原貞雄

我が國は、昔から豐葦原瑞穗國と呼ばれてゐる通り、地味が肥沃で、五穀が豐かに稔り、その上、位置が人類の棲息するに最も適當な緯度に當つてゐる。隨つて春夏秋冬の氣候の變化が適度に行はれ、盛夏と雖も華氏の九十度を超えることは少なく、嚴冬と雖も華氏三十度を下ることとは多くない。溫暖な春と、爽涼な秋とが比較的長く、春は櫻花をはじめ百花が爛漫として野山を飾り、禽鳥が到る處に聲を合せて囀る。秋は紅葉の錦が燦爛として山溪に輝き、鳴蟲が千草の中で妙なる音樂を奏でる。その

またなく　他夏の夕のそゞろ歩き、冬の朝の雪の眺もまたなく愉快である。

我が國は海上に點在する島國である。隨つて茫々千里に亙る大平原はない、いづこを涯とわからぬやうな大森林もない。程よい大きさの山川・平野が到る處にあり、海岸線も概して出入多く、海上には處々に小島が點在して、風情を添へてゐる。げに我が國土は、こゝに住む國民にとつては、恐るべき神祕でなくて、愛すべき自然である。

我が本土は列島の上に國を成してゐる關係上、大陸の一部に居を占めてゐる國々の民が屢、遭遇するやうに、他の強大國から壓迫される機會は、古來極めて稀であつた。

蹂躙

假令

兇暴なる他民族に蹂躙され、掠奪され、一地又は一國を擧げて焦土にされるといふやうな悲慘な運命に遭遇したことは、上下三千載を通じてたゞの一度もない。これ固より我が皇室の御稜威によつて、國家が常に健全であり、國民が武勇を尙んで、假令我が國を窺ふものがあつても、一擧にこれを擊退することが出來たからでもあるが、一つには我が國が地理的位置に惠まれてゐたからだともいへよう。

若し我が國がもつと遠い大洋の中に孤立してゐたならば、どうであつたらうか。よし他國の侵略は免れることが出來たとしても、文化の進歩は望むことが出來なか

文化

綜合大成

神國

つたであらう。然るに我が國は他國の文化と全くかけ離れるほど遠く孤立してはゐない。のみならず、海上の交通が夙に發達した結果、古來大陸との交渉も絶えず行はれ、爲に大陸に發達した文化は悉くこれを輸入し、吸收して、その進歩に資することが出來た。かくて我が國は遂に東洋文化の綜合者、大成者たる光榮をさへも擔ふに至つたのである。

まことに我が敷島の大和國は、最も惠まれた國土である。我が國は神の深き思召しによつて作られ守られてゐる國であるといふ自信、卽ち謂はゆる「神國」であるといふ信念を、我が國民が古くから抱いてゐるのは、決して理

過剩
狹隘
あめの下……本居宣長の歌。

由のないことではない。たゞ今日に於て、人口過剰の結果、國土の狹隘を感じ、物資の不足を告ぐるに至つたのは、國家として大いに考へなければならないことである。今後の我が國民は、積極的には農產物の增收竝びに工業の發達を圖り、且つ海外貿易の發展を企て、消極的には正しき節約を行ひ、無益の費を省くことによつて、物資の不足を補ひ、以て折角惠まれた自然の樂土を擁護し、益〻その樂土たる特質を發揮せしむるやうに努めねばならぬ。

あめのした*國はおほけどかむろぎのうみなしませる大八洲國

（提要　日出る國）

上田恭輔　東京市の人、ドクトル〝オブ〟フィロソフィー、滿蒙研究家、明治四年生。
租借地
尖端
視界

三一　滿蒙の四季

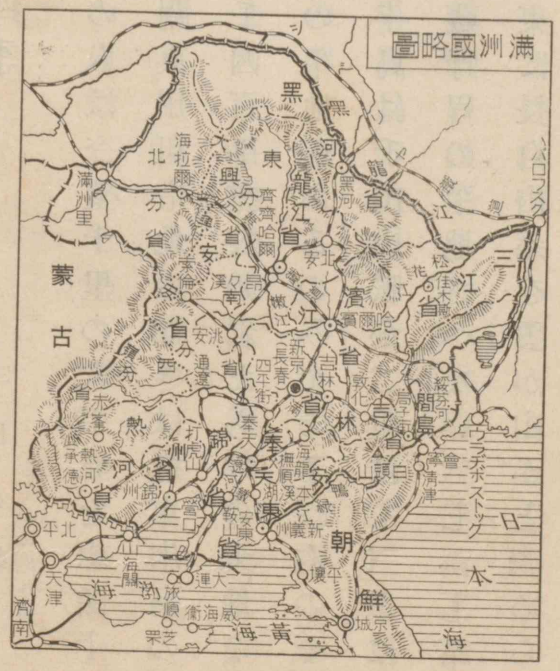
上田恭輔

「滿蒙」と言ふと、多くの人は一望千里の大平原を想像する。しかし現に我が關東州租借地の如きは、遼東半島の尖端にある僅かに三千四百平方粁の岩だらけの土地なので、海岸にだけ多少の平地があるのみである。右のやうに、奉天以南の遼東半島は、千山山脈が二重にも三重にも北から南に走り、武藏野程の平地さへない。しかし奉天以北になると、遙か東に長白山系を雲か山かと認められるだけで、これこそ一望千里、一物の視界を遮るものもないのみならず、更に洮南（タウナン）北西の地、或は海拉爾（ハイラル）地方、或は

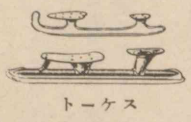
一眸

黒河の平原に立つと、まさに天地は一眸の内にあつて、その壯觀は、何とも形容すべき言葉もない。「揚子江の大を見ないものは、支那を知らないものだ。」と言ふが、それよりも、「滿蒙の平原を見ないものは、大陸の何たるかを解しないものだ。」と言はなければならない。

滿蒙の冬の天地は、山川草木あらゆるものが結氷する。その間が凡そ五箇



松柏　荒涼　ダイナマイト　頑健　煌々



月。日本では常磐の緑を誇る松柏も、凍えて黄色になる。だから、滿蒙では、滿目荒涼一點の緑色を見ず、西を見ても東を眺めても、雪と氷であり、畑も二米くらゐの深さまで岩石の如く固くなり、ダイナマイトでないと容易に穴が掘れないほどである。雪は砂糖のやうに細かく、一度降ると、翌年五月までは解けず、河や湖や沼の堅氷は、その上に枕木を並べて鐵道を架け、汽車を走らせても大丈夫である。この結氷時代が活動期であるから、餘程頑健なものでないと、滿蒙の天地には堪へられない。

日本人の小學校の校庭には、必ずスケート競技場があり、零下二十何度の酷寒の夜でも、煌々たる電燈の下で、ア

活躍

アイス・ホッケー

イス・ホッケーに興ずる青年男女が澤山ある。

遼河上に於ける橇の一隊

大河の上でも、個人の畑の上でも、勝手次第に往來する。

滿蒙幾萬方粁の地も、以前は鐵道の外には路らしい街道もなく、牛馬車輛を通ずる橋一つさへなかつた。そこで結氷期を待つて、交通・運搬の活躍が始る。何千萬噸と稱する大豆その他の穀類が、或は橇、或は八頭曳の荷馬車によつて、北から南へと運ばれる。湖水の上でも、

輸送

それは盛なものだ。

松花江・遼河・及び鴨綠江を滑る橇の輸送に至つては、確に滿洲獨特の運搬法である。松花江の如く千餘粁もある長い河の上を辷つて、特産物を輸送する荷馬車隊のためには、三十粁か四十粁毎に、臨時の宿屋が氷の上に開設される。暖國人の想像もつかない事柄であらう。

魁

日本の春の魁は、梅の花と鶯の初音である。滿洲では、黃塵萬丈が起つて始めて地上の氷や雪が解け、春の日のまさに近きを知る。支那には、「白髮三千丈」などと言ふ句があるが、滿蒙の黃塵だけは、萬丈は愚か、青天白日にしてなほ天地晦冥、一米前も見えず、晝の日中に電燈をつける

黃塵萬丈

白髮三千丈
「白髮三千丈、愁ニ緣ツテカクノゴトク長シ。」（李白）

晦冥

ことさへある。この黄塵萬丈に乘じて、明治三十八年三月十日、皇軍は露軍を追撃し、奉天城を占領したのである。この黄塵は玄海灘を越えて、遙か九州地方、或は宇都宮地方の空を掩うたことさへもあるのだから、驚かざるを得ないではないか。

四月の中旬になると、突如一夜にして地上に綠草が萌出で、次いで菫や蒲公英が咲く、土筆が芽を出す。同時に楊柳の枝が青くなる。「柳絮春雪を飄して、荷珠水銀を漾はす。」とは、梁の元帝の名吟として後世に傳はつてゐるが、楊柳の花の翩々として四散し、地に積つて雪かと思はれる美しい風景は、滿洲でないと見られない。

柳絮　荷珠　梁の元帝　名は繹、支那六朝時代の梁の皇帝。　翩々　越え。

梅は盆栽以外にはない。春の魁に咲く花は、杏と李である。梅花より濃艶であるが、惜しいかな、馥郁たる梅花の香を缺く。杏・李の花の散らない間に、梨・林檎、次は櫻、最後は桃と、百花爛漫、草も木も一時に花が開く。殊に美しいのは、藤と胡藤の花盛である。胡藤と言ふのは、アカシヤを詩的に和譯した名前で、僞槐のことである。五月の初旬に滿開となる。花には純白があり、淡紅があり、又淡青があり、ゴールデンチェーンと言つて黄金色のものもある。初は露西亞人が滿洲に移植したもので、旅順や大連の街路の並木に多い。櫻と藤は、大和男子が母國を偲ぶために、第二の故郷へ日本から輸入した懐かしい憧れ

盆栽　馥郁　アカシヤ　詩的　初旬

ライラック(ぢんちょうげ)

勿忘草

茜草

俄然

の花である。この他柘榴・牡丹・芍藥・野生のライラックなどの美しさに至つては、日本の花も到底及ばないほどの艶麗さを見せてゐる。

かくて南滿洲の春は、昨日まで氷に鎖された天地が、俄然として百花爛漫、あらゆる禽鳥の囀る光景に一變する。鶯も、雲雀も、杜鵑も、何もかもけたゝましく囀り、恰も小鳥屋の前に佇むやうな感じがする。

北滿になると、春も秋もない。冬から夏へ、夏から冬へ一足とびである。松葉牡丹が地上に絨緞の如くに彩られ、玫瑰と呼ぶ紅白の野薔薇が、垣根に新裝を粧ひ、野に勿忘草や、茜草や、僅かに十二三糎の豆燕子花などが咲亂れ

昇る—上る
せゝ。
蘇生
挽茶色

る頃は、早くも夏である。

公主領附近に於ける羊の放牧

哈爾賓から北滿鐵道の沿線へかけては、漸く新綠になつたかと思ふと、五月の中旬には、既に氣溫が華氏の九十度近くに昇り、毛衣を捨てるや否や、一躍して白服に白靴の世界と變る。

何と言つても滿洲の新綠は美しい。氣候の乾燥するせゐであらう、各種の楊柳・樺・楡はもとより、蘇生した松柏の葉までが、鶯の羽のやうに美しい挽茶色に彩られる。洋畫家の

憧れるのも決して無理ではない。

暑氣の盛な頃になつて、華氏百度以上の高溫に昇ると、汗はどし〳〵蒸發して、身に纏ふ衣のびしよ濡れになると言ふやうなことはなく、皮膚もさら〳〵して粘り著かない。だが、日光の直射は、焦げつくばかりに强烈である。

夏の朝は、四時の時計の音を聽くと、東の空が早くも白む。そして夜は八時近くまで明るい。夜の空のすがすがしさと、星の近くて大きいのと、大空に濕氣がないのとで、天は恰も青磁色をなしてゐる。六千年の昔に、*メソポタミヤで天文學の發達した理由が、滿蒙の夏の夜の大空を眺めて、いかにもと理解される。

濕氣

青磁色

メソポタミヤ　ペルシヤ（イラン王國）の西、トルコの南、ティグリス・エウフラテス兩河の流域地方。

遠く海を離れてゐる大陸の氣候は、日本人に想ひもよらない變化が多い。たとへば、北滿地方で、日中は百度にも近い酷暑の夏の夜が、眞夜中の二時になると、毛皮の外套を羽織つて、それでも顫へるほどの寒さに冷えることもある。また地に置く露の夥しいことを見ては、雨降らぬ蒙古の沙漠に、雜草の繁茂する理由もなるほどと頷かれる。

一年に一回、七月の下旬から八月の中旬まで、ちやうど一箇月ほど雨が續く。日本の入梅のやうに、連日びしよびしよと降るのではない。豪雨とはかゝる雨を言ふのかと思はれるほど、勇壯きはまりなく、恰も空一面の大きい

酷暑

冷え。

頷く

豪雨

きはまり

盥の水を、一度にひつくり返したやうな勢で落ちるのである。息づく隙もないくらゐの大降雨で、市中の道路は忽ち河と化し、渾河・太子河のやうな巨大な河も一時に氾濫する。滿洲で、平常は一滴の水さへも見ない砂原の河床の上に、長い長い鐵橋が架けてあるのは、このためである。だが、幸にかゝる豪雨も二日とは續かない。忽ち降り、忽ち青天白日となる。まことに男らしい雨である。我が關東州租借地では、右の一年一回の雨を一滴も逃すまいと、各處の山間溪谷に、大規模の堰堤を築造して、幾つとなく貯水池を設けてゐるが、既に百萬の人口を支へるだけの上水の設備が完成してゐる。

くらゐ。
氾濫
堰堤
上水

四季を通じて、滿洲の秋は最上の好季節である。春のやうに黃塵萬丈の苦しみもなく、事實に於て天は高く馬は肥え、大空には一點の白雲を見ず、中秋の滿月を賞するには持つて來いの上天氣が續く。だが、惜しいかな、その良季の秋の日はまことに短い。北滿洲に行くと、秋は僅かに二週間くらゐで、忽ち煖爐に親しむ世の中となる。しかし、朝鮮に近い安奉線沿道の深山幽谷の秋の紅葉は、燃える火焰のやうに美しい。萩は秋木と呼ぶやうに床柱になるくらゐの大木もある。女郎花も人間の脊丈くらゐに高い。桔梗・撫子の花の濃艶華麗に至つては、到底濕つぽい日本の花の比ではないと思はれる。

中秋
幽谷
華麗

かゝる秋草の美も、草叢に啼くあらゆる蟲の美音も、物質本位の支那人には毫も顧みられない。彼等は、蟬が鳴止み、蟋蟀が合奏を始めると、早速に農產物の收穫の用意に取りかゝるのである。

―（新滿洲國寫眞大觀）―

新編國文讀本

改制版　卷一終

國語假名遣表

わ・は

語中・語尾ニテハわトハ ト紛レ易シ。左ノ語ノ外ハ概ネはヲ用キル。

あわ（泡・沫）　みなわ（水沫）
あわつ（周章）　あわたゞし（倉皇）
いわし（鰯）
いひわけ（言分）　のわけ（野分）
うらわ（浦廻）　しまわ（島廻）
うわる（植）
かわく（乾・涸）
くつわ（轡）　はにわ（埴輪）
くわゐ（慈姑）
ことわざ（諺）　しわざ（爲業）
ことわり（理）　ことわる（斷）
こわいろ（聲色）
こわね（聲音）
こわだか（聲高）
さわぐ（騷）
さわやか（爽）
しわ（皺）　しわむ（皺）
しわし（吝）
すわる（坐）
たわし（束藁子）
たわむ（撓）
たわわに（撓）
たわやか（婀娜）　たわやめ（手弱女）
たわら（俵）
はらわた（腸）
ひわ（鶸）
よわし（弱）　かよわし（弱）

ゐ・い・ひ

語頭ニテハゐトいト紛レ易シ。語中・語尾ニテハゐ・い・ひ互ニ紛レ易シ。左ノ語ノ外ハ概ネひヲ用キル。

ゐ（井）　ゐげた（井桁）
ゐど（井戸）　ゐぜき（井堰）
ゐなか（田舍）
ゐ（居）
ゐざり（膝行）
ゐしき（臀）
かもゐ（鴨居）
しきゐ（敷居）
くもゐ（雲居）
しばゐ（芝居）
とりゐ（鳥居）
まどゐ（團欒）
もとゐ（基）
ゐ（亥）
ゐくび（亥首）
ゐのこ（豕）
ゐのしし（猪）
いぬゐ（乾）
ゐ（藺）　ふとゐ（莞）
あゐ（藍）　くれなゐ（紅）
あぢさゐ（紫陽花）
うなゐ（髫髮）
かたゐ（乞食）
くわゐ（慈姑）
せゐ（故）
なゐ（地震）
ゐる（率）　ひきゐる（率）　もちゐる（用）　まゐる（參）
おい（老）
くい（悔）
むくい（報）
音便ニテき・しガいト ナルモノ。例ヘバ、
さいはひ（幸）
たいまつ（炬火）
ついぢ（築地）
ついたち（朔日）
ついたて（衝立）
ついで（序）
やいば（刃）
かうがい（笄）
きさい（后）
かいて（書）
さいて（喚・裂）
ないて（泣）
おもい（重）
かなしい（悲）

え・ゑ・へ

語頭ニテハえトゑト紛レ易ク、語中・語尾ニテハえ・ゑ・へ互ニ紛レ易シ。左ノ語ノ外ハ概ネへヲ用キル。

ゑ（繪畫）
ゑがく（畫）
ゑかき（畫工）
ゑのぐ（繪具）
ともゑ（巴）
ゑ（餌）
ゑさ（餌）
ゑづく（嘔吐）
ゑ（穢）
ゑど（穢土）
ゑじ（衞士）
ゑぼし（烏帽子）
ゑんじゆ（槐）
こゑ（聲）
すゑ（末）
こずゑ（梢）
すゑひろ（末廣）
つくゑ（机）

ゑむ（笑）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑふ（醉）
ゑひどれ（醉漢）
ゑる（彫）
ゑぐる（刳）
○うゑる（飢）
○うゑる（植）
△うゑき（植木）
○うゑこみ（植込）
○すゑる（据）
△すゑもの
△いしずゑ（礎）
○すゑぶろ（据風呂）
ゑぐし（薮）

え（兄）
えと（兄弟）
きのえ（甲）
ひのえ（丙）
つちのえ（戊）
かのえ（庚）
みづのえ（壬）
え（枝）

えだ（枝）
しずえ（下枝）
ながえ（轅）
すはえ（條）
え（江）
いりえ（入江）
ふえ（笛）
のどぶえ（喉笛）
さゞえ（螺螄）
ぬえ（鵺）
ひえ（稗）
あえる（肴）
あまえる（甘）
いえる（癒）
いばえる（嘶）
おびえる（脅）
おぼえる（覺）
きえる（消）
きこえる（聞）
こえる（肥）
こえる（越）
こゞえる（冷）
すえる（饐）
はえる（映）
ゆふばえ（夕映）

はえる（生）
ひこばえ（蘗）
ふえる（增）
ほえる（吠）
みえる（見）
もえる（燃）
もえる（萌）
もえぎ（萌黃）
もだえる（悶）

を・お・ほ（ふ）

語頭ニテハおトヲト紛レ易ク、語中・語尾ニテハほトをト紛レ易シ。左ノ語ノ外ハ概ネ語頭ニテハお、語中・語尾ニテハほヲ用キル。

を（男・雄・夫・牡）
をす（牝）
をつと（夫）
をとこ（男）
めをと（夫婦）
をひ（甥）
たけを（猛夫）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
ををし（雄）

を（小）
をとめ（少女）
をぢ（伯叔父）
をば（伯叔母）
を（峯・岑）
をのへ（峯上）
を（尾）
をばな（尾花）
を（緒）
をどし（絨）
を（麻・苧）
をけ（桶）
をさ（筴）
をだまき（苧環）
をか（岡・丘）
をかぼ（陸稻）
をぎ（荻）
をけら（朮）
をこ（愚・痴）
をこがまし（痴）
をこぜ（騰）
をさ（長）
をし（鴛鴦）
をしかは（韋）
をそ（獺）
をち（遠）

をちこち（遠近）
をとし（一昨年）
をとゝひ（一昨日）
をとり（囮・媒鳥）
をの（斧）
をみな（女）
をみなへし（女郎花）
をり（檻）
をり（節）
をろち（大蛇）
をがむ（拜）
をかす（犯）
をさむ（修）
をしふ（敎）
をしむ（惜）
をし（惜）
をどる（踊・跳）
をののく（慄）
をはる（終・卒）
をめく（叫）
をる（居）
をる（折）
をしき（折敷）
しをり（栞）
しをる（萎）

つゞらをり（九十九節）
をかし（可笑）
をさなし（幼）
をさをさ（大抵）
あを（青）
あをがひ（青貝）
あをし・あをむ（青）
いさを・いさをし（功・績）

うを（魚）
かつを（鰹）
しらを（白魚）
さを（竿）
たをやか（嬋娟）
たをやめ（手弱女）
とを（十）
ばせを（芭蕉）
みさを（操）
みを（澪・水脈）
みをつくし（澪標）
わざをぎ（俳優）
かをる（香）
しをる（萎）
まをす（申）
しをらし（可憐）

やをら（徐）
ふト書キテをト發音スル場合。
あふひ（葵）
あふぐ（仰）
あふぐ（煽）
あふぎ（扇）
あふる（煽）
あふち（楝）
あふみ（近江）
きのふ（昨日）
とほとふみ（遠江）
けふ（今日）
さふらふ（候）
たふる（倒・仆）
たふとし（貴）
はふる（投）
ふくろふ（梟）
かげろふ（陽炎）

じ・ぢ

ぢハ語頭・語中・語尾イヅレニアリテモじニ紛レ易シ。少數ノぢヲ暗記スベシ。左ノ語ノ外ハ概ネじヲ用キル。

ぢ（父）

をぢ（伯叔父・小父）
をぢ（爺・祖父）
ぢぢ（爺・祖父）
ぢ（路）
こうぢ（小路）
みそぢ（三十）
よそぢ（四十）
やまぢ（山路）
よみぢ（黃泉）
あぢ（味）
あぢ（鰺）
あぢさゐ（紫陽花）
うぢ（氏）
かぢ（梶）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
くぢら（鯨）
こうぢ（麴）
ことぢ（琴柱）
すぢ（筋）
ひぢ（臂）
なんぢ（汝）
ねぢ（螺旋）
ねぢく（拗）

もみぢ（紅葉）
わらぢ（草鞋）
なめくぢ（蛞蝓）
ちぢむ（縮）

ず・づ

ずトづトハ紛レ易シ。少數ノずヲ暗記スベシ左ノ語ノ外ハ概ネづヲ用キル。

ずず（數珠）
ずみ（楠）
あんず（杏子）
ゆず（柚子）
いしずゑ（礎）
こずゑ（梢）
かず（數）
きず（傷）
くず（葛）
すず（鈴）
すず（錫）
すずき（鱸）
すずし（生絹）
すずしろ（蘿蔔）
すずな（菘）

すゞめ（雀）
すゞり（硯）
ねずみ（鼠）
はず（箸）
はずみ（機）
みみず（蚯蚓）
もず（百舌鳥・鵙）
ず（誦）
たたず（佇）
なずらふ（準）
ひずむ（歪）
まず（雜・混）
ずるし（狡猾）
すずし（涼）
かならず（必）
すずろ（漫）

さ行變格ノ濁レルモノ。例ヘバ、
禁ず
信ず
論ず　等

常用略字表

（括弧内の小字は字典體）

乱(亂) 来(來) 併(倂) 仮(假) 偽(僞) 児(兒)
両(兩) 剋(剋) 剰(剩) 剤(劑) 労(勞) 励(勵)
勧(勸) 嘱(囑) 国(國) 囲(圍) 円(圓) 図(圖)
塀(堺) 壱(壹) 寿(壽) 学(學) 冗(冗) 実(實)
写(寫) 宝(寶) 属(屬) 帯(帶) 廃(廢) 廳(廳)
径(徑) 徒(徒) 従(從) 悩(惱) 惨(慘) 恋(戀)
戯(戲) 扣(控) 択(擇) 担(擔) 拠(據) 摂(攝)
叙(敍) 数(數) 断(斷) 条(條) 栄(榮) 楽(樂)
楼(樓) 様(樣) 権(權) 歓(歡) 帰(歸) 残(殘)
気(氣) 浅(淺) 渕(淵) 滞(滯) 満(滿) 潜(潛)
沢(澤) 湿(濕) 済(濟) 滝(瀧) 湾(灣) 営(營)
炉(爐) 為(爲) 犠(犧) 独(獨) 猟(獵) 献(獻)

瓶(甁) 画(畫) 留(留) 畳(疊) 発(發) 尽(盡)
研(硏) 礼(禮) 称(稱) 窓(窗) 糸(絲) 経(經)
縦(縱) 総(總) 継(繼) 続(續) 欠(缺) 声(聲)
聴(聽) 粛(肅) 脳(腦) 胆(膽) 台(臺) 挙(擧)
旧(舊) 万(萬) 薬(藥) 処(處) 虚(虛) 号(號)
虫(蟲) 蚕(蠶) 蛮(蠻) 覚(覺) 観(觀) 解(解)
触(觸) 証(證) 訳(譯) 誉(譽) 読(讀) 変(變)
豊(豐) 賎(賤) 賛(贊) 走(走) 軽(輕) 弁(辨)
辞(辭) 逓(遞) 遅(遲) 辺(邊) 医(醫) 釈(釋)
銭(錢) 鋳(鑄) 鉄(鐵) 関(關) 随(隨) 双(雙)
霊(靈) 顕(顯) 余(餘) 併(倂) 舘(館) 駅(驛)
随(髓) 体(體) 闘(鬪) 塩(鹽) 庶(庶) 麗(麗)
麦(麥) 点(點) 党(黨) 斉(齋) 歯(齒) 齢(齡)
竜(龍) 亀(龜)

昭和十二年五月二十六日印刷
昭和十二年五月二十九日發行
昭和十二年十二月 十 日訂正再版印刷
昭和十二年十二月十三日訂正再版發行

新編國文讀本 改制版

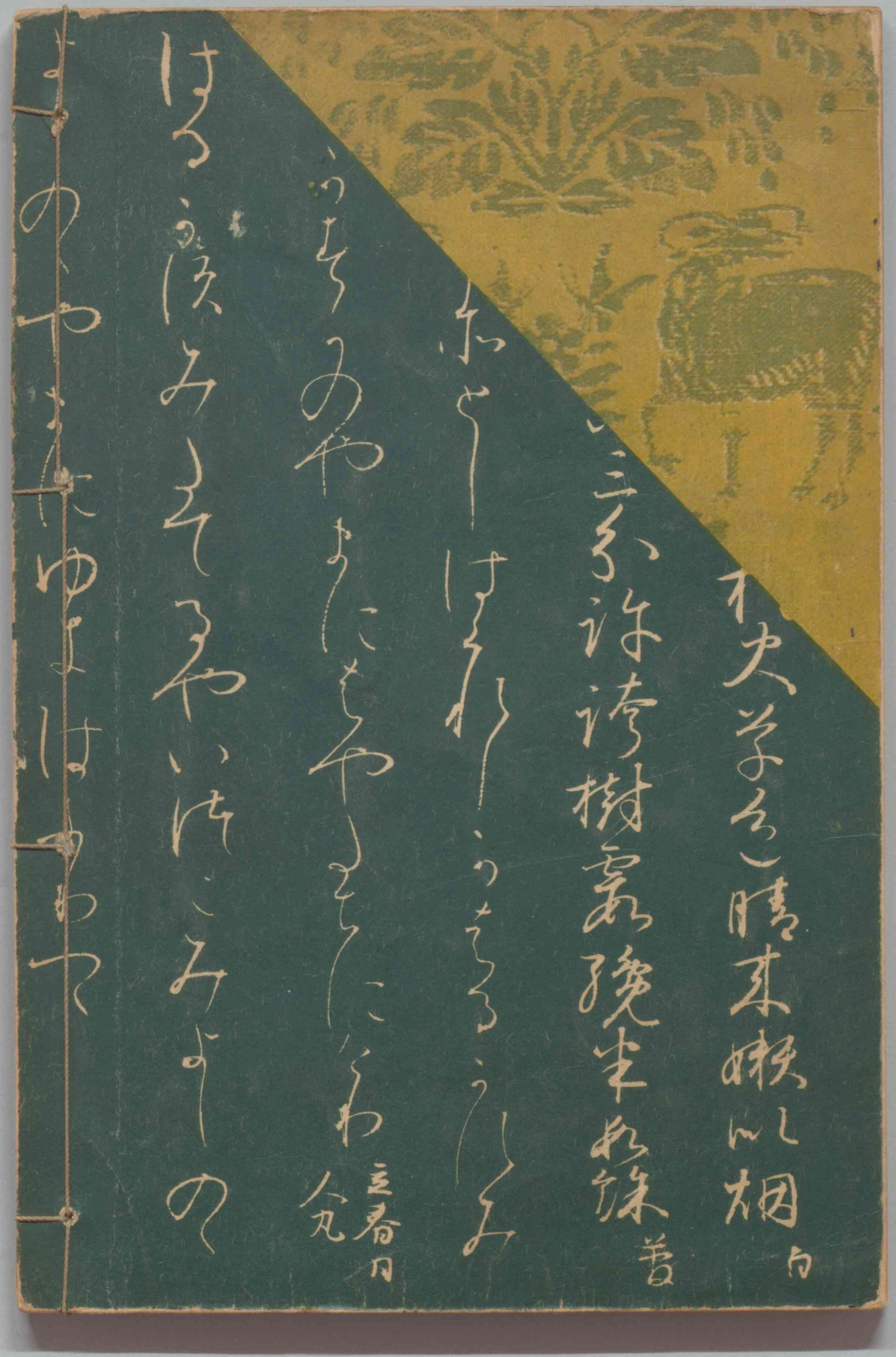
定價 卷一—六 各金六拾錢
卷七—十 各金五拾八錢

一四藤井保

著作權所有

編輯者 千田憲 東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地
發行者 塚田六彌 東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者 白井赫太郎 東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所 精興社

發行所 右文書院 東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地 電話駒込(82)二五八〇番 振替口座東京七四五二八番

大賣捌 東京 林平書店 大阪 柳原書店 名古屋 敎生社 久留米 金文堂

ふそはる大空のそら晴来秋し相
うそみのやま詠樹霧晩雪秋篠 普
はるがすみそらにもやもやにわ 立春
のやまかすみよのなかはわて 入